

松井田町文化財調査報告書第2集

人見北原遺跡

——（一）磯部停車場妙義山線道路特殊改良
（二種）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査——

1990

群馬県松井田町教育委員会

人見北原遺跡

— (一) 磯部停車場妙義山線道路特殊改良
(一種) 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

1 9 9 0

群馬県松井田町教育委員会



道路状遺溝（北東上空から）



人見北原遺跡全景（南東上空から）

序

「歴史的文化遺産の宝庫」これが、私たちのふるさと松井田町を表現することばとして最適といえるでしょう。いま全国各地で、発掘調査による重要な発見がマスコミにより報道され、一種のブームともいえるにぎわいを見せていますが、松井田町でも町内各地における調査の成果が発表されるにつれて、新たな発見が表面化してきています。また、戦国期の山城である松井田城跡や、特に碓氷関所跡、峠のアブト式などの鉄道関係施設等は「交通の歴史」を語る遺産として、古代東山道や近世中山道とともに、松井田を語るうえで特徴的な遺産とされています。

いま間近に迫った21世紀にむかって、めまぐるしく移り変ろうとしているこの松井田に、私たちは未来を託していかねばなりません。上信越自動車道や新幹線の開通、そして各種の大規模開発等、多くの出来事が矢継早に進んできます。

このような中で、松井田町では町民の一人一人がよりよいふるさとづくりに取組んでおります。町民憲章の最初に「わたくしたちは、ふるさとを愛し、香り高い文化と教育のまちをつくります。」とうたわれ、私たちが香り高い文化と教育の中で、より充実した生活を送るために、そして私たちのふるさとをより知るために、文化遺産もその活用をとおして生かしていくかなければなりません。

このたび、県道改良工事に伴い、人見北原遺跡の発掘調査が行われ、古墳時代・平安時代の住居跡をはじめ、「妙義道」の一部とみられる道路状の遺構も見つかりました。ここは松井田工業団地遺跡と隣接した場所でもあり、この成果が報告されることによって人見地区の歴史解明の一助となり、更に文化財保護への一層の理解と認識を深めていただける資料となれば幸いです。

最後に、調査の実施および報告書の作成にあたり、多大なる御協力をいただきました関係各機関と各諸氏に対しまして厚く御礼を申し上げます。

松井田町教育委員会

教育長 宮下 初太郎

例　　言

1 本書は、平成元年度（一）磯部停車場妙義山線道路特殊改良（一種）工事に伴う、人見北原遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査遺跡の地番は次のとおりである。

群馬県碓氷郡松井田町大字人見北原93-1～2

・	・	94-2
・	・	94-7～8
・	・	96-1
・	・	96-4

3 発掘調査事業主体者は、松井田町教育委員会である。

4 調査は松井田町教育委員会により実施した。

事務局 松井田町教育委員会社会教育課

調査担当 水澤祝彦

5 発掘調査は、平成元年4月11日から平成元年5月28日まで実施し、整理作業を含め平成2年3月25日まで行われた。

6 本調査にかかわる出土資料、記録資料のすべては、松井田町教育委員会が保管している。

7 整理作業は原田利英、廣瀬君江が主にあたった。

8 本書の編集は水澤が担当し、執筆は水澤・廣瀬・原田が行ない、文末に執筆者名を記した。記名のないものは水澤が行なった。また、上原富次氏より「妙義道」についての考察の下稿を預つた。胎土、石材鑑定は小林二三雄氏にご教示を賜った。

9 本書に掲載した写真は遺構写真を水澤が、遺物写真を原田・廣瀬が撮影した。

10 実測、トレース、拓本は、原田・廣瀬が行なった。

11 調査および報告書作成にあたり、次の関係各機関、各諸氏より多大な御指導、御協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

協力機関：群馬県道路建設課、安中土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、安中市教育委員会、井上工業株式会社、箕輪山木彫藝術株式会社、有限会社青高館

協力者：磯部淳一、上原富次、恩田 登、小林二三雄、大工原 豊、田口 修、山田幸則

12 調査参加者は次のとおり。

上野 矢尖	袖野 畏平	小此木よし子
門屋 孝	神戸 数子	神戸 直子
齐木 恒男	塩谷 弘美	白石 弘子
土屋 道江	牛島 久	中村 久司
野田 達也	野田 純子	平林 習仁
山田 和吉		

凡例

- 1 本書の挿図に使用した方位記号は磁北を示す。
- 2 本書での遺構実測図、遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

遺構	住居跡	1 / 80	カマド	1 / 50
	土坑 1、2	1 / 40	溝	1 / 80
	土坑 3	1 / 80	道路状遺構	1 / 80
	ピット群	1 / 80	全体図	1 / 500
- 3 遺物番号は、通し番号とし、実測図、観察表が共通している。
- 4 遺物観察表中の()は完形品以外の推定値、復元値を表わす。
- 5 漆柄図の破線は推定復元を表わす。
- 6 遺構図面に使用したスクリーントーンは下記のとおりである。



焼 土

- 7 遺物図面に使用したスクリーントーンは下記のとおりである。



塗付着面範囲



炭化物付着面範囲



内面黒色処理



灰釉の範囲



砥石使用面

- 8 本書で使用した地形図は図-1 国土地理院2.5万分の1「松井田」。附編図-1 国土地理院2.5万分の1「松井田」を1/2に縮少し、掲載した。

目 次

第1章 発掘調査の経過と遺跡の環境

I 発掘調査の経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 位置と環境	4

第2章 遺構と遺物

I 遺構	8
II 遺物	18

第3章 まとめ	32
---------------	----

写真図版

附編 妙義道の考察	I
-----------------	---

附図版

第1章 発掘調査の経過と遺跡の環境

1 発掘調査の経過

1 調査に至る経過

群馬県内における大規模な開発の波は、松井田町においても例外ではない。松井田工業団地造成や町内延長19.5kmにも及ぶ上信越自動車道の建設など、多くの開発事業が行われる中で、私たちの居住環境にも変化があらわれようとしている。

各種の開発行為により、数多くの文化財が破壊されていく中において、その保護・保存対策は現代社会における課題のひとつとしてあげられる。避けられぬ開発に対しての方策として、発掘調査による記録保存処置が行われている事実もあげられる。

松井田町・安中市にまたがる、平成元年度一般県道礎部停車場妙義山線道路特殊改良第一種工事が計画され、その実施に伴う埋蔵文化財の保護について、群馬県教育委員会文化財保護課との協議により、両市町の境界線を挟んで各教育委員会により対処することになった。

これに対して、該当地は地表面の遺物の散布が認められるとともに、隣接地が松井田工業団地遺跡として周知の遺跡でもあり、その埋蔵文化財の保護対策については発掘調査を実施することになった。これに伴い、群馬県知事と松井田町長との間で埋蔵文化財調査委託契約を平成元年4月10日付けで締結し調査に入った。

当初は発掘調査のみの内容であったが、遺構の検出が少なく、調査計画の見直しが行われた。この中で、発掘調査終了後に遺物整理作業を続けて実施することを検討し、期間の大幅な見直しが行われ、平成元年5月23日付けで変更委託契約が行われた。

2 調査の方法と経過

発掘調査（4月11日～5月28日）

調査は工事予定地内全面を対象として行うこととしたが、西側の北斜面寄り及び北側低地部分については、JR信越本線に対する安全性を考慮して調査対象から除外した。

現場作業は4月11日の機材運搬に始まり、表土の除去作業は重機による掘削とダンプによる搬出を行った。

区域内の基準線設定にあたっては、工事に伴う道路中心杭を基準として10mメッシュで調査区内を網羅した。中心杭方向をX軸、それに直交する方向をY軸として(X-Y)の標記方法とした。調査区西端の中心杭N15を基準に(0-0)として、それぞれ10mごとに杭打ちを行った。

調査は、表土除去後に遺構確認のための精査を行い、遺構分布の全容確認につとめた。安中市と

表土除去作業



の境界に接して側溝をもつ道路状遺構の存在が確認できたため、その調査方法について安中市教育委員会発掘調査担当者と協議した結果、松井田町教育委員会担当の調査区内として処理することになった。遺構完掘状態の記録写真の一部及び調査地区全体写真は、アドバルーンによる空撮を行い、あわせて道路状遺構の全体的な地表観察の資料化にも供した。

5月28日、土坑3及び道路状遺構の補測とともに、現場の機材撤収作業を以て発掘調査の全工程を終了した。

整理作業（5月29日～3月25日）

調査の変更契約に基づいて、5月29日より報告書作成を含めた整理作業を開始した。遺物の整理作業は、洗浄・注記に始まり、順次接合復元・実測・トレース・破片の拓本・写真撮影・写真及び図版版下作成と進めた。その間、現場で作成した遺構実測図・調査区全体図等の各種図面類の点検等の整理を並行して行い、トレース・図版版下作成等の遺構関係整理作業を行った。

検出された遺構のうち道路状遺構については、妙義神社参拝道としての「妙義道」である可能性が考えられたために、これに対する考察をどのように取扱うか検討した。現状での資料把握と、その地域における研究状況から、上原富次氏（松井田町文化財調査委員）に執筆を依頼し附編として掲載することとした。

区分	月	4/11	5	5/28
現場準備・整備				
1号住居				
2号住居				
3号住居				
4号住居				
土坑1				
土坑2				
土坑3				
道路状遺構				
ピット群				
溝1				

表1 発掘調査工程

区分	月	5/29	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3/25	備考
遺物整理	洗浄・注記												
	接合・復元												
	実測												
	トレス												
	拓本												
	版下作成												
	写真撮影												
	写真版下作成												
遺構整理	原図整理												
	トレス												
	版下作成												
	写真版下作成												
	遺物観察表												
	本文												
その他													校正

表2 整理作業工程

II 位置と環境

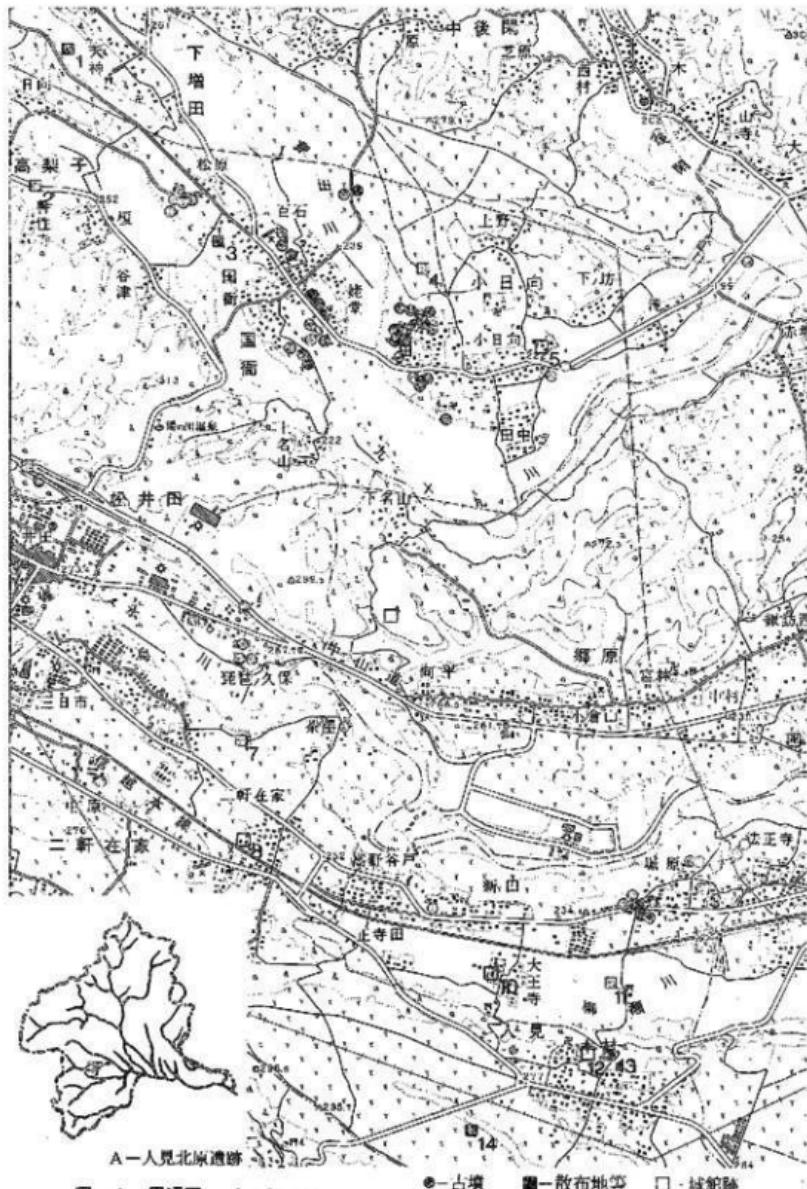
地理的環境

人見北原遺跡の所在する松井田町は、群馬県西部に位置し、北は倉渕村、東は安中市、南東は妙義町、南西は下仁田町、そして西は碓氷峠をはさんで長野県北佐久郡軽井沢町と接する。

今回調査された人見北原遺跡は、松井田町の東端で安中市と境界をはさんで接している。地形は碓氷川中流の右岸、西横野丘陵にそった中位段丘上に位置し、標高は 260m で東に向かって緩やかな傾斜を示している。遺跡地から西を望むと妙義山・浅間山の威容がうかがえる。

No.	遺跡名	時代種別	遺跡の概要	備考
1	(下増田 天神原)	縄文～平安	縄文中期から後期の遺物が散布。土器類、須恵器がみられる。散布地は天神原と細野地区まで広範囲にわたっているものと思われる。	耕作により三角墳形土壙出土。
2	(高梨子 中戸戸)	赤生～平安	周辺部は濃密な散在地。弥生土器、土器類、須恵器がみられる。高梨子津区全般にわたって、濃密な分布が予想される。	道路改良工事。 表面採取。
3	田衝演跡群	縄文～近世	縄文中期・後期各層と豊六住居、弥生中期・後期、平安中期の豊六住居。古墳 2 基。田衝、下増田にまたがり広範に散布地が認められる。	発掘調査実施（松井田町教育委員会、S 59～61年度）
4	(小日向 中原・臼田)	縄文～平安	縄文土器、土器類、須恵器が散布する。小日向地区で古墳群とともに分布域は広がるものと思われる。	表探による。
5	小日向城	中世	松井田城の東北の出城として武田氏時代に築かれたものと思われる。	
6	愛宕山遺跡	奈良～平安	豊六住居 5 軒。4 軒住居からは木工用具、装身具、執職員、万年進宝出土。	発掘調査実施（群馬県教育委員会、S 46年度）
7	(一新存家 上座馬)	古墳～平安	土器類・須恵器が散布する。周辺への広がりが想定される。	表面採取による。
8	川田陣屋	近世	平郊陣屋址。元和 2 年旗本河田政義により築かれる。	
9	(人見 法正寺)	古墳～平安	土器類・須恵器が散布する。古墳群の中にあり周辺の濃密な散布が認知される。	表面採取による。
10	大王寺城	中世	方形城址か。上原兵庫の城と伝えられる。	
11	松井田工業用地演跡	縄文～平安	発生から平安時代の住居跡約 450 軒。B 墓石下の水田跡。古墳。	発掘調査実施（群馬県企画局・松井田町教育委員会、S 59～60年）
12	人見城	中世	南北朝期、足利氏に属した人見四郎忍和の館として創建され、戰国期に大改修されたと思われる。	
13	人見谷津演跡	縄文～古墳・中世	発生後期竪穴住居、人見城塔跡。縄文土器、弥生土器、土器類出土。	発掘調査実施（松井田町教育委員会、S 61年度）
14	上人見遺跡	弥生	弥生中期の窯・甕・スクレイバー出土。	発掘調査実施（群馬県立博物館・東大文化人類学研究室、1965年）

表 3 周辺遺跡の概要



歴史的環境

人見北原遺跡は、北が塚原・足名庄・法正寺地区の古墳群、西の松井田工農園地遺跡に隣接しており、古墳時代から平安時代までの集落遺跡の広がりが予想されていた。ここで周辺の遺跡について概観してみる。

◎松井田工業団地遺跡

人見字大土寺・城下・清水庄・大頭龍・塚原・大宮・一つ下り・北原にまたがる27ヘクタールに及ぶ地域を対象に調査が行われた。これにさきがけて、1979年の農道拡幅工事に伴う発掘調査では平安時代の竪穴式住居跡が検出されているために、周辺における遺跡の広がりが考えられていたが、弥生～平安時代の住居跡約450軒、古墳、B軸石埋没水田跡、縄文～平安時代の遺物が多数検出された。平安時代の碓氷郡の礎部郷の可能性も指摘されている。

◎古墳群（塚原・足名庄・法正寺地区）

人見字塚原・足名庄・法正寺地区を中心に古墳が密集してみられる。全て横穴式石室を主体部とした円墳である。保存状態の良い古墳は少なく、墳丘規模のはっきりしたものはない。正式な発掘調査例はなく、副葬品などの正確な資料は検討できないが、およそ6世紀末から7世紀代におさまるものと思われる。

◎人見谷津遺跡

松井田工業団地造成用地内にあった大宮神社の移転用地について事前調査が行われ、弥生時代後期の住居跡2軒が検出された。このうち2号住居跡は、構式終末の様相とともに縄文施文系の影響を強く受けている。

参考文献

- ・『松井田町の文化財（改訂版）一概史散歩』松井田町教育委員会 1986年。
- ・松井田町文化財調査委員会編『松井田町の文化財』松井田町教育委員会 1974年。
- ・『松井田町誌』松井田町誌編さん委員会 1985年。
- ・『群馬県立博物館研究報告第14号 群馬県地域における弥生時代資料の集成』群馬県立博物館 1978年。
- ・新井順二・小野和之「達水川流域における弥生式土器の様相」『群馬考古遺稿』11 群馬県考古学講習会 1985年。
- ・群馬県教育委員会文化財保護課編『教材群馬の文化財1－原始・古代編－』群馬県教育委員会 1980年。
- ・山崎一「群馬県古城墓址の研究 下巻」群馬県文化事業振興会 1972年。
- ・山崎一「群馬県古墳墓地の研究 上巻」群馬県文化事業振興会 1979年。
- ・『遺跡見学会のご案内 松井田工業団地遺跡（大王ヶ遺跡）』 群馬県企業局・松井田町教育委員会 1985年。

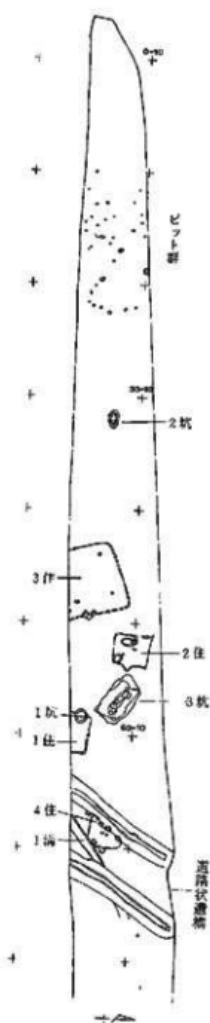
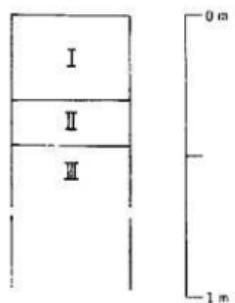


図-2 調査区全体図



I 明黒色土層 表土層鈣石を多く含む
 II 明黒色土層 鈣石粒を含む、しまっている
 III 黒色土層 鈣石粒を含む、しまっている

図-3 基本層序

第2章 遺構と遺物

I 遺構

調査区は、北側をJR信越本線により切られており、西は松井田工業団地として造成がなされている。西から東にむかってわずかに傾斜し、東端において道路状遺構で区切られ、これが松井田町と安中市の境界と重なっている。

今回の調査で検出された遺構は、堅穴式居跡4軒、土坑3基、ピット群、道路状遺構1、溝状遺構1である。堅穴式住居跡は、古墳時代のもの1軒、平安時代のもの3軒で調査区の東半に集中して検出され、東の安中市教育委員会調査又に集落が続いている。調査区西半は遺構が少ない傾向にあり、ピット群と土坑1基のみの検出であった。道路状遺構の調査区外での状況は北北東から南南西に地表観察が可能であり、鉄道建設による切断以前のつながりがわかる。

3号住居(図-4・図-5)

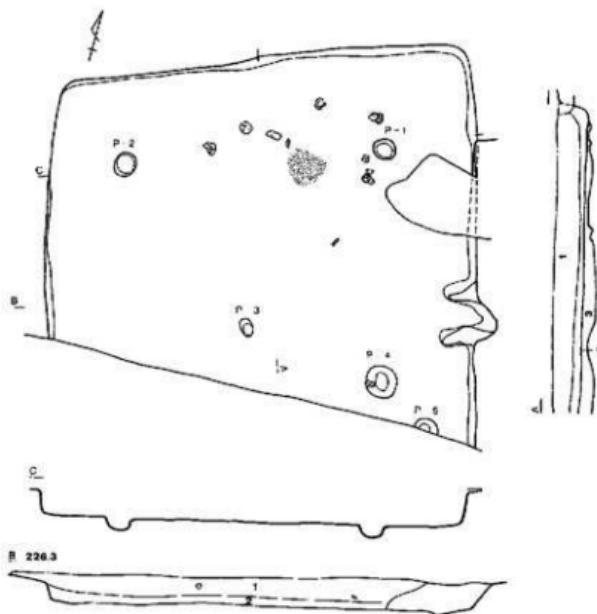
調査区の中央部やや東寄りに位置する。規模は、北壁軸で5.8m。東壁側は5.65mで調査区域外にかかる。住居の南側が調査区域外のため全容は不明であるが、平面形は方形を呈すると考えられる。東壁側の一部は壊乱によって上面が削られる。確認面からの深さは、西壁側で45cmを測る。遺存状態はよい。調査区内では大型の住居跡になる。

床面は、ロームブロック主体の黒褐色土を叩き貼り床とし、ほぼ平坦で堅くしまる。床面にピットを5基検出した。主柱穴は3基でP1は径35cm、深さは17cm、P2は径33cm、深さは17cm、P4は径48cm、深さは24.5cmを測る。柱穴間の間隔は東西3.3m、南北2.9mである。柱穴以外のピットはP3とP5で、その性格については不明。柱穴の南北間P1寄りに焼土を検出した。貯蔵穴、壁周溝は確認できなかった。

カマドは、東壁のやや南寄りに位置する。煙道部が外に出る以外は住居内にある。焚口部から燃焼部にかけて擂鉢状にくぼみ、煙道部が斜めに立ち上がる。袖部はローム主体の黄褐色土を構築材としており、堅くしまる。内壁は赤褐色を呈し、もうろい。貼付層の下は、両袖部分が凹んだ掘り方をしている。

遺物(図-18・図-24)は、134点出土したが、大半が破片であり、完復できたものを26点掲げた。床面から土師器の高坏(18)小型甕(20)壺(9)こも石状の石(89)が、丸形か、それに近い状態で、住居跡の北壁側中央から東寄りで出土。覆土中から土師器の壺16点、甕片5点、高坏片1点が、西壁寄りの南北方向に集中して出土した。

(原田)



1層 暗褐色土層 ローム粒、ロームブロック少量含む。バサバサしている。

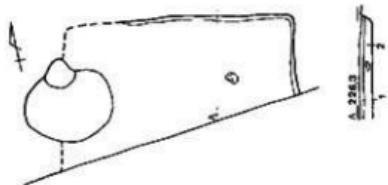
2層 黄褐色土層 ロームブロックやや多く含む。

3層 黒色土層 ロームブロック主体、よくしまっている(粘土)

図-4 3号住居 平面・断面図

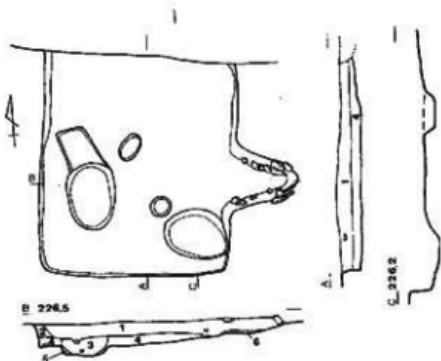


図-5 3号住居 カマド平面図・断面図



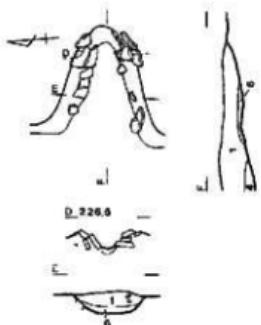
1層 黒褐色土層 しまりなし
2層 暗褐色土層 全体に黄白色の軽石微粒子とローム粒を含む。

図-6 1号住居 平面・断面図



1層 黒褐色土層 黄色粒、白色粒、炭化物を含む。しまっている。
2層 明褐色土層 ローム粒を含む。しまっている。
3層 明褐色土層 ローム粒を含む。よくしまっている。
4層 黒褐色土層 黄色粒、白色粒、ロームブロックを含む。よくしまっている。
5層 明褐色土層 ロームブロックを多く含む。
6層 黒褐色土層 全体に施土粒を含む

図-7 2号住居 平面・断面図



1層 黒褐色土層 黄色粒、白色粒、炭化物を含む。しまっている。
4層 黒褐色土層 黄色粒、白色粒、ロームブロックを含む。よくしまっている。
6層 黒褐色土層 全体に施土粒を含む。

図-8 2号住居 カマド平面・断面図

1号住居（図-6）

調査区の中央東よりの南端に位置している。3号住居の東側にある。住居西側と推定される箇所が土坑1と重なっている。住居跡に伴うものであるかは不明。切合関係については確認できなかった。平面形は北壁側の一部と東壁側の一部が確認できただけで、調査区外が南にあり明瞭でない。規模は北壁側で、推定3.25m。東壁側で、1.15mで調査区外にかかる。確認面からの深さは北壁下で、17cmを測る。床面は全体的に平坦である。壁周溝・柱穴は確認できなかった。カマドについては調査区外にあり、東壁側にあるものと推定される。

遺物（図-19）は須恵器の完形坏（29）1点。縄文の破片1点を含む、46点が出土しているが、実測できたもの11点を掲げた。床面出土のものではなく、ほとんどが中央近くと推定される覆土中より出土している。多くがII層よりの出土である。器種は、高台付椀（27、28）、坏（26、29、30）、甕（31、32、33、34、35、36）である。
(廣瀬)

2号住居（図-7・図-8）

調査区の中央部東寄りに位置する。規模は、南壁側で2.6m。西壁側は3.1mで攪乱部にかかる。北壁側が攪乱で切られたために全容は不明であるが、平面形は長方形を呈すると想われる。各壁共ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは、南壁側で30cmを測る。遺存状態はよい。

床面は、多少凸凹があるもののほぼ平坦で堅くなっている。ピットは1基検出した。径30cm、深さ30cmを測る。南東の隅にある浅い削り込みは貯蔵穴とは認められなかった。西壁側の浅い削り込みもその性格については不明。

カマドは、東壁やや尚寄りに構築されており、壁に沿って焚口部の石が配され、その一部が遺存する。燃焼部は屋外に設けられ、煙道が屋外へ張り出す。上部構造は削られていて不明である。

遺物（図-20、図-25）は、住居中央付近の覆土中より31点出土したが、すべて破片であり、実測できたもの（縄文破片1点を含む）を14点掲げた。土師質の塊2点、甕1点、須恵器の坏2点、塊5点、甕2点、羽釜1点、土師器の甕1点である。西壁側より内外面「利」と墨書きされた須恵器の坏（37）は床面直上ではなくかなり浮いた状態で出土した。
(原田)

4号住居（図-9・図-10）

調査区の東端に位置し、溝1によって南東角を切られており、側溝1によって北西側が大きく斜めに切られているため、平面形は確認できない。規模は、東壁側で推定3m、北壁側では0.74mで側溝に切られており、南壁側は1.8mが現存している。確認面からの深さは12cmあり、床面はかたくなっている。

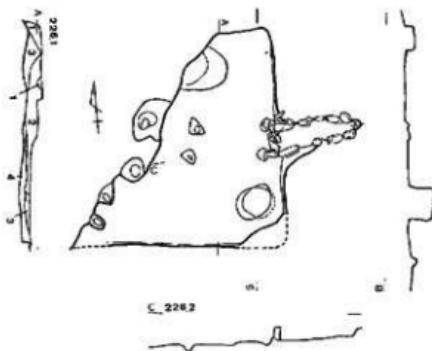


図-9 4号住居 平面・断面図

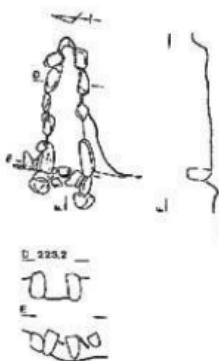


図-10 4号住居 カマド平面・断面図

- 1層 明黑色土層 やや黄色い、軽石を含み、やや砂質である。
- 2層 黒色土層 線色粒、黄色粒を含む、やや粘性をもつ。
- 3層 明黑色土層 やや黄褐色をおびる、少し粘性をおび、ややしまっている。
- 4層 塗黄色土層 ロームブロック、黄色粒、褐色粒を含む、よくしまっている。

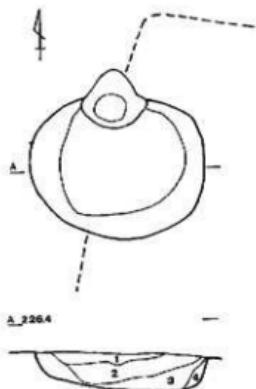
西側床面にピット5基を検出したが、本住居跡に伴うものとは思われない。周溝、柱穴については検出できなかった。

カマドは東壁の中央にあり、煙道部先端は屋外に112cm突出する。煙道の壁に沿って石が配され、中ほどに不整長方形の扁平な天井石が1つ残っていた。焚口部の両側には軽石が残っており、甕の破片が出土している。

貯蔵穴はカマド右側に検出された。長径の上場52cm、下場45cm。短径の上場40cm、下場42cmの舟型形を呈す。確認面からの深さは35cmで底面が平坦になっている。

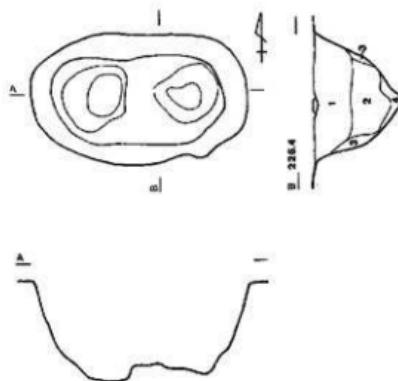
遺物は、貯蔵穴より高台付塊(50)、环(51)、甕(52)の破片が出土した。甕(52)はカマドと貯蔵穴内から出土し接合する。

(廣瀬)



- 1層 黒色土層 ローム粒少量含む。
2層 黒色土層 ローム粒少量、炭化物多量
に含む。
3層 黒色土層 ロームブロックを多量に含む。
4層 明黑色土層 ローム主体

図-11
土坑1 平面・断面図



- 1層 黒色土層 ローム粒、小石を少量含む。
2層 黒色土層 炭化物を多量に含む。
3層 明黑色土層 ローム粒を多量に含む。
4層 明黑色土層 ローム主体

図-12
土坑2 平面・断面図

土坑1(図-11)

調査区の中央東よりに位置し、1号住居の西壁側と推定される箇所と重なっている。1号住居に伴うものであるかは不明。規模は長径の上場1.24m、下場0.9m、短径の上場1.0m、下場0.75m、の梢円形で、壁部はゆるやかに立ちあがり、確認面からの深さは26cmを測る。北壁側で、長径の上場46cm、下場22cm。短径の上場42cm、下場19cm。確認面からの深さ21cmの不整梢円形を呈したピットに切られている。II層は炭化物を多量に含むが、その性格については確認できなかった。

出土遺物はなかった。

(廣瀬)

土坑2(図-12)

調査区の中央よりやや西よりに位置する。底部に、東西に2ヶの浅いくぼみを伴う梢円形を呈す。規模は長径の上場1.53m、下場1.24m、短径の上場0.91m、下場0.63m。確認面からの最深は71cmである。側壁に径7~8cmほどの穴が横向きに多数あるが、人為的なものであるか確認できなかった。出土遺物はなかった。

(廣瀬)

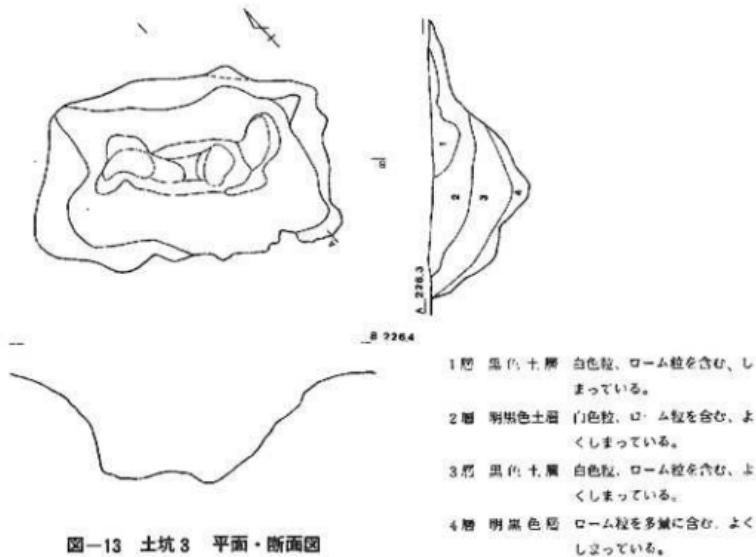


図-13 土坑3 平面・断面図

土坑3 (図-13)

調査区中央より東側にあり、2号住居と1号住居の間に位置する。底部に2ヶの浅いくぼみを伴う不整長方形を呈す。南東壁はなだらかな斜面で落ち込み、北西壁は底面部から急に立ちあがり、ゆるやかに弧を描いて確認面に達する。規模は長径の上場4.05m、下場1.6m。短径の上場2.51m、下場0.34mを測る。

出土遺物は破片12点であるが、実測できたもの2点を掲げた。土坑の北東側に集中して出土している。その多くがI層よりの出土であり、本土坑に伴うものではない。本土坑の性格については不明。

(廣瀬)

ピット群 (図-14)

調査区の西よりに位置し、10-10のグリッドから東界13mの区間に大小32基のピットが検出された。全体的に浅く、位置的に見て掘立柱建物構造の可能性も考えられたが、各ピットの埋土状況及び形状からは確認には至らなかった。

(廣瀬)

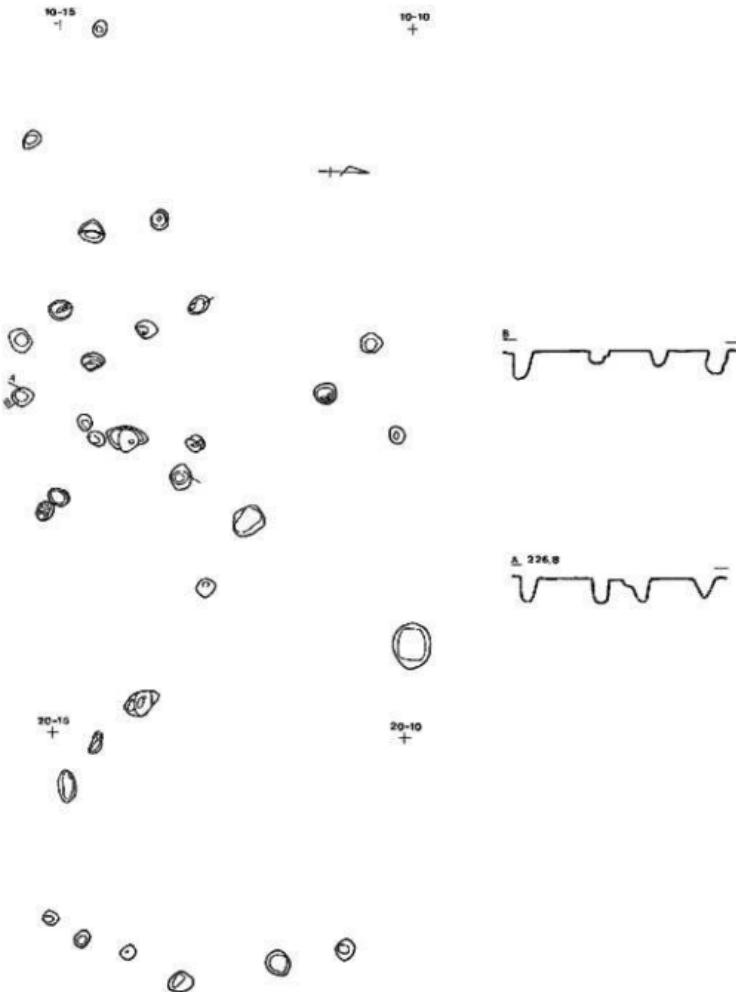


図-14 ピット群 平面・断面図

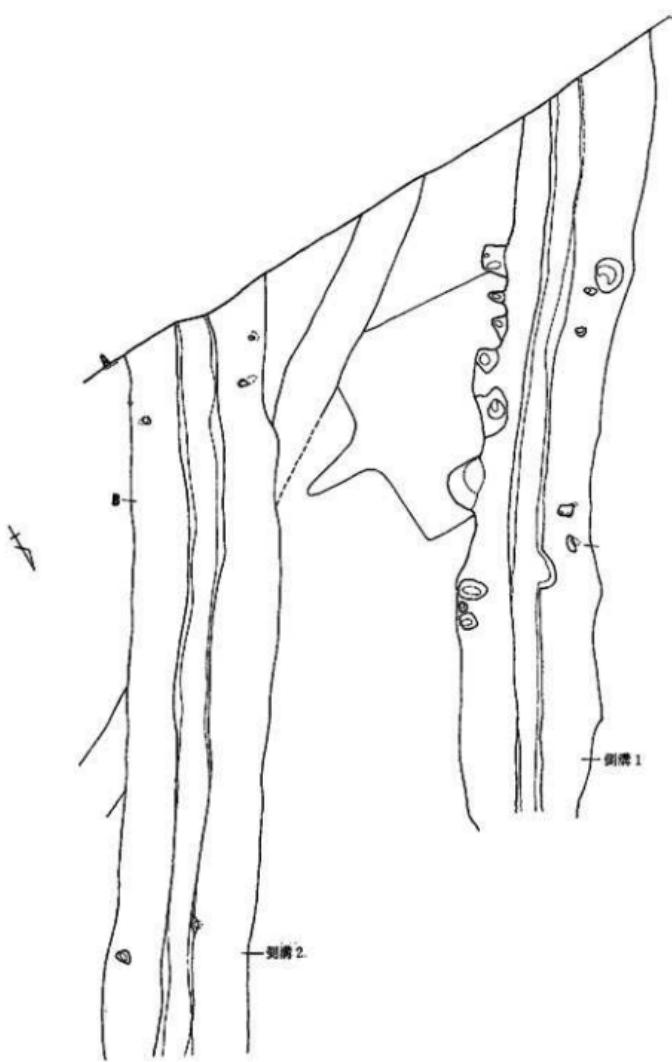
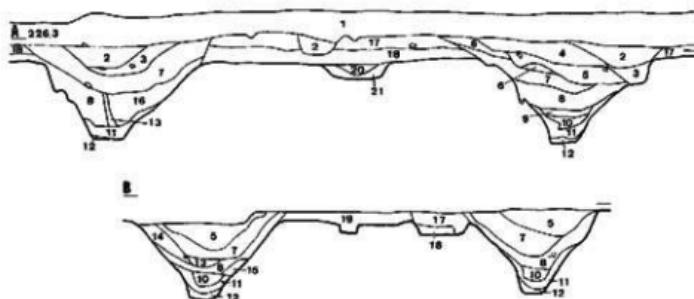


図-15 道路状達構 平面図



- 1層 明黒色土層 軽石を多く含む、表土層
 2層 黒色土層 軽石を多く含む
 3層 黒色土層 軽石を含む
 4層 明黒色土層 軽石、ロームブロックを含む
 5層 黒色土層 軽石を多く含む
 6層 明黒色土層 軽石、ロームブロックを含む
 7層 哈黄色土層 軽石、ロームブロックを含む
 8層 黒色土層 軽石を多く含む
 9層 黒色土層 軽石を多く含む
 10層 明黒色土層 軽石を多く含む(淡黄色)
 11層 哈黄色土層 軽石、ロームブロックを多く含む
 12層 哈黄色土層 ロームブロック土体
 13層 黒色土層 軽石を多く含む
 14層 明黒色土層 軽石を多く含む
 15層 明黒色土層 ロームを含む
 16層 黒色土層 やや粘性、しまる
 17層 黒色土層 黄色粒、ローム粒含む(住居廃土)
 18層 哈黄色土層 ロームブロックを多く含む(住居廃土)
 19層 明黒色土層 黄色粒を含む、しまる
 20層 哈黄色土層 極細粒を含む、18層よりしまる
 21層 哈黄色土層 ロームブロックを多く含む

図-16 道路状遺構 断面図

道路状遺構

調査区東端に位置し、4号住居跡と溝1を切っている。道路両側に側溝を伴い、両側溝を含めた幅は6.65~6.68m、道路面の幅2.85mでかたくふみしめられている。道路面西側端にピット9基を検出したが、本遺構に伴うものかは確認できない。

側溝1の上幅1.68~2m、下幅0.18~0.38m。道路面からの深さ1.1m。側溝2の上幅1.93~2.1m、下幅0.28~0.48m、道路面からの深さ1.2mを測る。掘り方は中段を有するロート状を呈し、上端から一旦傾斜で掘り下げ、途中から急角度で20~35cm掘り込んでいる。この中段までの壁面に横向きに10~20cmの穴が所々に検出されたが、その性格については確認できない。

側溝底部付近では、土層堆積状態から、自然埋没に伴い改修作業を行って維持・管理をしてきた可



図-17 溝1 平面・断面図

能性が考えられる。その後は手を加えずに自然埋没のままに道路を使用していたと思われる。

遺物は実測できたもの7点を掲げた。うち覆土上層からは須恵器壺破片(57、58)、が出土している。

(濱源)

溝1 (図-17)

調査区の東端に位置し、4号住居の南東角を切り道路状造構の側溝2により一部削り取られているが、北東方向にのみ調査区域外(安中市教育委員会調査区)へと続く。幅は遺存状態の良い所で上幅74cm、下幅57cm、確認面よりの深さ20cmを測る。時期性格については不明。(廣瀬)

II 遺物

I 土器

今回の調査で確認された遺物のうち、土器類で実測したものが92点である。このうち遺構に伴うもの及び表採遺物を含めて、完形に近いものは8点のみで、大多数が復元実測によるものである。

内容は、縄文土器5点、土師器34点(壺20、高壺3、甕11、台付甕1)、上師質土器8点(壺2、塙3、甕3)、須恵器41点(壺4、塙13、甕20、壺3、羽釜1)、灰陶陶器3点(壺2、甕1)、土鍋1点の計92点である。

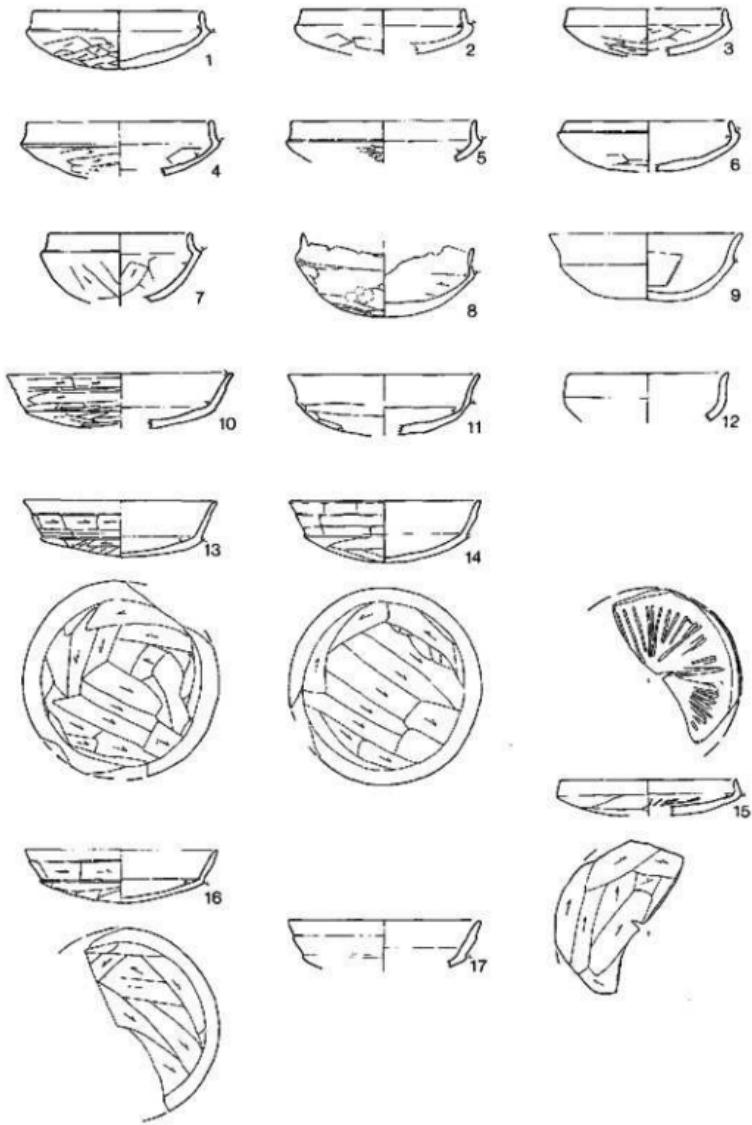


图-18 遗物 3号住居 (1~17)

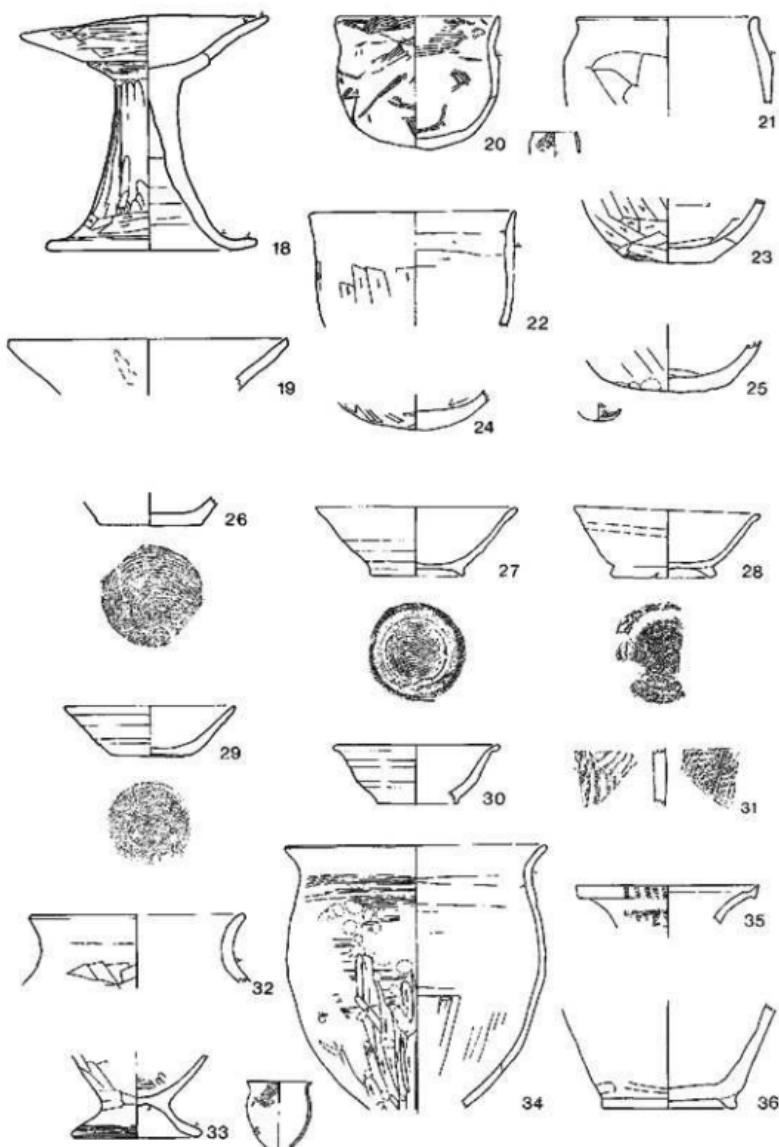


図-19 造物 3号住居(18~25), 1号住居(26~36)

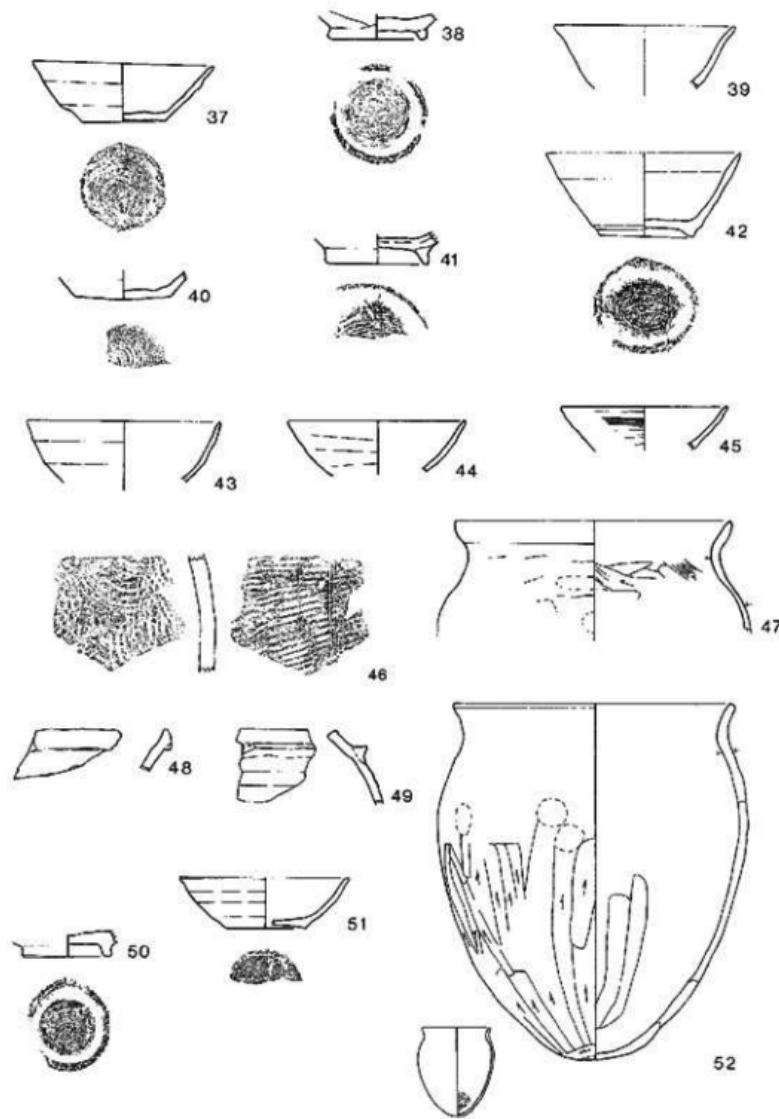
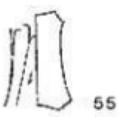


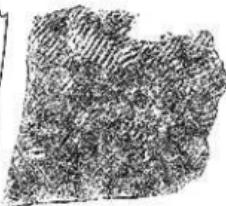
図-20 遺物 2号住居 (37~49), 4号住居 (50~52)



55

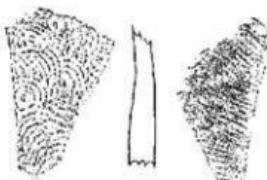


54



56

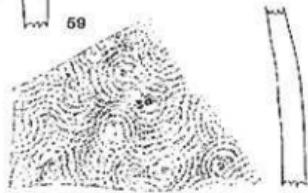
57



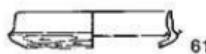
58



59



60



61



62



63

図-21 遺物 土坑3 (53・54), 道路状遺構 (55~60), 表採 (61~63)

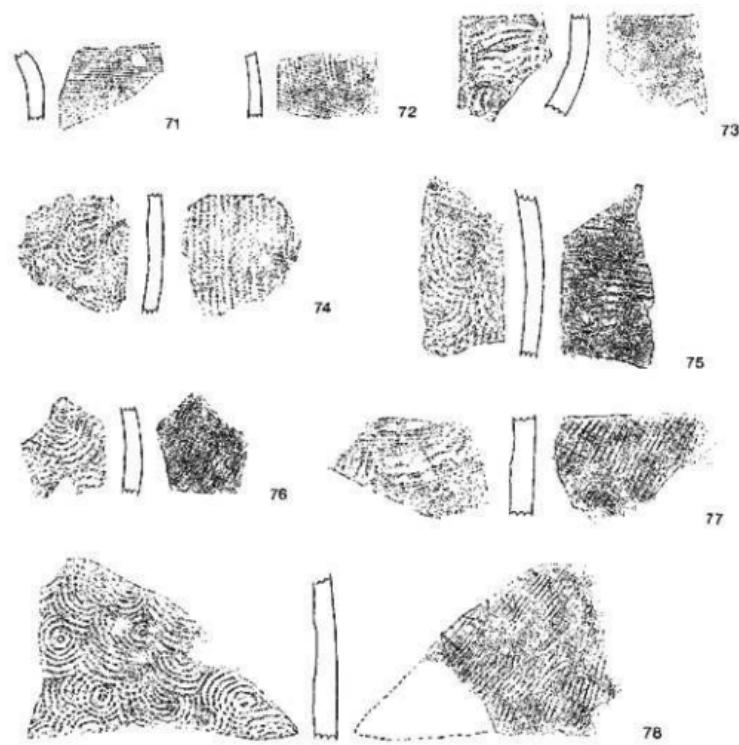
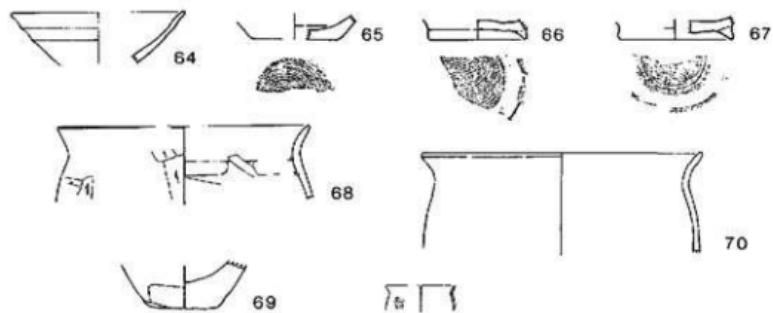


図-22 遺物 表採 (64-78)

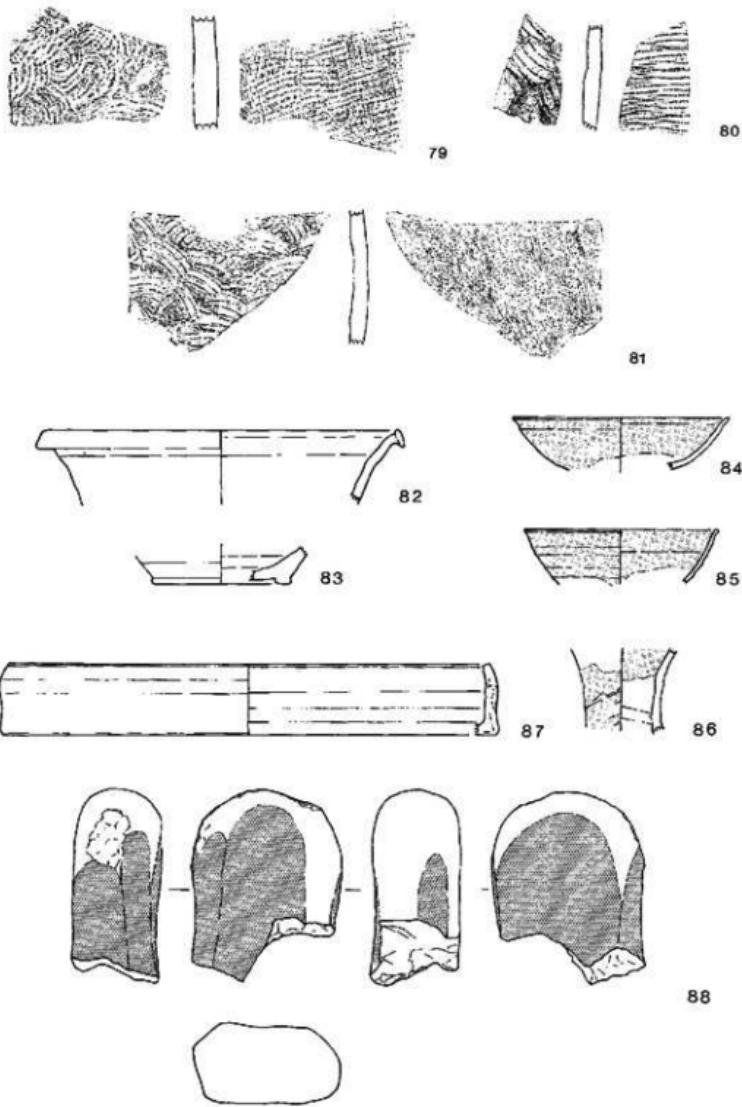


図-23 遺物 表採 (79~87), 道路状遺構 (88)

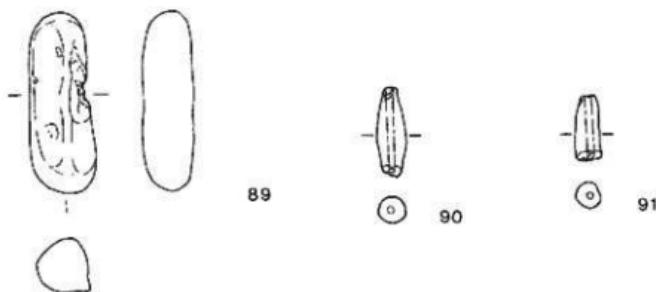


図-24 遺物 3号住居 (89), 表採 (90)

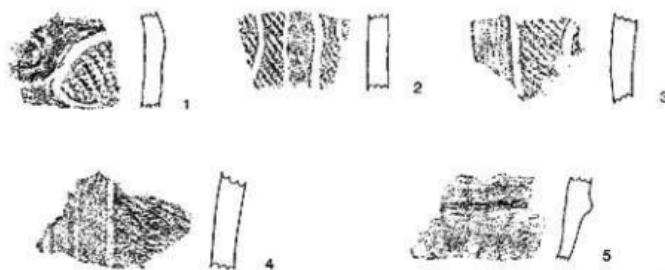


図-25 遺物 繩文土器

2 その他の遺物 (88~90)

石製品は2点である。内容は磁石として使用されたと思われるもの1点、所謂「孤行」状の形状のもの1点である。

土製品は土器2点である。

3 繩文土器

確認された本遺跡出土の該期の土器は、図示した5点を含めて9点のみである。遺構についても確認できなかった。

- 1 隆蒂を取付け、LRの単節縄文施し後に沈線により横円状に区画する。
- 2 LRの単節縄文を施し、2本の沈線が懸垂して無文部を有す。縄文帶に蛇行懸垂文を施す。
- 3 RLの単節縄文を施し、2本の沈線が懸垂して無文部を有す。縄文帶に蛇行懸垂文を施す。
- 4 雜な無節縄文を施し、3本の浅い沈線が懸垂し無文部を有す。
- 5 微隆蒂を横位に貼りつけている。

1は3号住居の覆土よりの出土。2~5は表探遺物である。加曾利E式期後半に属するものと思われる。

表4 遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成形・整形の特徴	①地土 ②焼成 ③色調 ④斑存	備考
1	土師器 杯	口径(12.0) 器高 4.1	丸底。外面上に明瞭な波を有し口縁部 直腹気味に立ち上がる。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ。	①内閃石粗粒、安山岩 ②良好 ③灰褐色 ④山脚部~体部2/3	住居裏土出 土
2	土師器 杯	口径(11.6) 器高(3.3)	外面上に波を有し口縁部直腹気味に立 ち上がる。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ。	①粗石の歯数多量に含む ②良好 ③灰褐色 ④口縁部~体部破片	住居裏土出 土
3	土師器 杯	口径(11.4) 器高 3.4	外面上に波を有し口縁部直立気味に立 ち上がる。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ体部ナギ	①粗石、鈍石、粗灰質砂 岩 ②良好 ③灰褐色 ④山脚部~体部破片	住居裏土山 土
4	土師器 杯	口径(13.4) 器高(4.2)	外面上に波を有し口縁部直めに立ち上 がる。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ。体部へ ラナギ。	①粗石、鈍石 ②良好 ③褐色 ④口縁部~体部破片	住居裏土出 上
5	土師器 杯	口径(13.2)	外面上下に明瞭な波を持ち口縁部直 腹気味に立つ。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ体部ナギ	①石英、粗石、砂岩、鈍 石 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部~体部破片	住居裏土出 土
6	土師器 杯	口径(12.0) 器高(3.7)	丸底。外面上に波を持ち口縁部直く内 腹気味に立つ。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。	①研石の斑紋含む ②良好 ③褐色 ④口縁~体部破片	内面黒褐色 住居裏土出 土
7	土師器 杯	口径(10.2) 器高(5.3)	深い体部。外面上に波を持ち口縁部直く立 ち上がる。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ。体部へ ラナギ。	①粗石、石英、安山岩小 粒、粗灰質砂岩 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部~底 部破片	住居裏土出 上
8	土師器 杯	口径 12.5	丸底。外面上に波を持つ。底盤堅厚で 口縁部余る。	外面 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ。年部へ ラナギ後ナギ。	①石英、砂岩、安山岩な どの細粒 ②良好 ③淡 褐色(70% (口縁~底部 1/4後欠損)	住居裏土出 上

表 5 遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成形、整形の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
9	土師器 杯	口径 16.0 器高 4.8	丸底。外縁に棱を持ち外傾して聞く。 器肉厚めでもろい。	外縁 口縁部横ナギ。体部へ ケケリ後ナギ。 内面 口縁部横ナギ。体部ナ ギ。	①石英、軽石、砂岩 ②良好 ③淡褐色 ④口縁部(口縁部1/3周欠 損)	床面出土
10	土師器 杯	口径 16.0 器高 4.0	体部浅めで外縁に棱を持ち外傾して 聞く。口縁部は沈線技法。	外縁 口縁部小口状工具によ る横ナギ。体部へタグ ズリ。 内面 口縁部横ナギ(体部ナギ)	①輕石細粒、良質粘土 ②良好 ③淡褐色 ④口縫部~体部1/4周	内面墨色 住居廻土出 土
11	土師器 杯	口径 14.0 器高 4.3	外縁に棱を持ち外傾して聞く口縁厚。	外縁 口縁部横ナギ。体部へ ラウズリ。 内面 口縁部横ナギ。	①石英、軽石 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部~体部1/3周	住居廻土出 土
12	土師器 杯	口径 11.6	丸底を有する体部。口縁部直立気味に 立ち端部で鋸く外反。	外縁 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ(体部ナギ)	①石英、軽石 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部1/2周	住居廻土出 土
13	土師器 杯	口径 14.2 器高 4.1	浅い丸底。外縁に棱を持ち外傾して 聞く。第4段は沈線技法。	外縁 口縁部小口状工具によ る横ナギ。体部へタグ ズリ。 内面 口縁部横ナギ(体部ナギ)	①石英、安山岩 ②良好 ③淡褐色 ④口縫部1/4周欠 損)	内面墨色 住居廻土出 土
14	土師器 杯	口径 14.0 器高 4.4	丸底。外縁に棱を持ち外傾して聞く。	外縁 口縁部小口状工具によ る横ナギ。体部へタグ ズリ。 内面 口縁部横ナギ。	①輕石の断続、安山岩の 小破 ②良好 ③淡褐色 ④口縫部完形	内面墨色 住居廻土出 土
15	土師器 杯	口径 12.8 器高 2.6	浅い丸底。口縁部近く内腹気味に立 つ。	外縁 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ(体部ナギ) 後放射状にヘラミガキ。	①石英、軽石、雲母 ②良好 ③淡褐色 ④体部1/2周、口縫部1/4 周	内面墨色 住居廻土出 土
16	土師器 杯	口径 14.0 器高 4.4	浅い丸底。外縁に明瞭な棱を持ち外 傾して聞く。	外縁 口縁部小口状工具によ る横ナギ。体部へタグ ズリ。 内面 口縁部横ナギ(体部ナギ)	①安山岩の小破、軽石の 粗粒多量に含む ②良好 ③淡褐色 ④口縫部~ 体部1/2周弱	住居廻土出 土
17	土師器 杯	口径 14.0	外縁に棱を持ち外傾して聞く。	外縁 小口状工具による横ナ ギ。 内面 横ナギ。	①摩石、凝灰質砂岩 ②良好 ③淡褐色 ④口縫部破片	住居廻土出 土
18	土師器 高杯	口径 17.5 底径 13.5 器高 16.7	杯部下部に棱を持ち外傾して聞く。 器肉は高めで底盤ナギ付次に聞く。	外縁 口縁部横ナギ。体部へ ケケリ後ナギ。 脚部後へラケズリ後ヘ ラナギ。底部横ナギ。 内面 杯部横ナギ。底部ナギ	①雲母、石英、粗粒、黑 褐色の断続 ②良好 ③黄 褐色 ④口縫部完形	内部内輪削 施有 内面出土
19	土師器 高杯	口径 20.0	外傾して聞く。底部外縁に棱を持ち る。	外縁 内外面横ナギ。	①凝灰質砂岩、雲母小片 ②良好 ③淡褐色 ④口縫部破片	住居廻土出 土
20	土師器 小型盤	口径 11.6 器高 9.4	脚部球形を呈す。齊らみを持ち加 めに立つ口縁部。	外縁 口縁部横ナギ(投部分的 にヘラミガキ)。脚部へ ラケズリ後不規則削除へ ラミガキ。 内面 口縁部横ナギ後ヘラミ ガキ。脚部ナギ(脚部 ナギ)。	①石英、安山岩の小破 ②良好 ③淡褐色 ④口縫部完形	床面出土
21	土師器 壺	口径 12.6	口縁部丸底を持ち短く立つ。器肉厚 めでもろい。	外縁 口縁部横ナギ。脚部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ。脚部ナ ギ。	①石英、砂岩 ②良好 ③淡褐色 ④口縫部~脚上1/4周	住居廻土出 土
22	土師器 甕	口径 14.8	口縁部直線的に立ちあがる。粗穢を 多量に含み脚部凹凸有。	外縁 口縁部横ナギ。体部へ ラケズリ。 内面 口縁部横ナギ。脚部へ ナギ。	①粗品片岩等多量、石英 ②赤褐色 ④口縫部~脚上1/2周	住居廻土出 土

表6 遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	各形の特徴	成形・整形の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
23	土師器 盤	底径 6.1	平底。内側気味に立つ脚下位。	外側 脚部一側下段へラケズ り。 内面 脚部一側下段へラナダ	①石英細粒、軽石、砂岩 ②良好 ③淡褐色 ④底部破片	住居壁土出土
24	土師器 盤	底径 1.8	脚手の底部。	外周 ヘラケズリ。 内周 ヘラナダ。	①劣化が著しく含む。軽石 石英颗粒、砂岩 ②良好 ③灰褐色 ④底部破片	住居壁土出土
25	土師器 盤	底径 2.5	丸底に近い平底。内側気味に立つ脚 下位。	外周 ヘラケズリ。 内周 ヘラナダ。	①劣化。石英颗粒、安 山岩含む ②良好 ③ 淡褐色 ④底部破片1/2周	住居壁土出土
26	土師質 环	底径 7.2		外周 石英颗粒混入。 内周 回転ナダ。	①劣化 ②軽石、石英含む ③良好 ④黄褐色 ⑤底部	住居壁土出土
27	須恵器 高台付 环	口径 14.5 底径 6.5 高さ 4.9	低い台部。底部直線的に外傾して脚 く。	外周 回転ナダ。芯付部は貼 付け。 内周 回転ナダ。	①芯は小片、角閃石 ②良好 ③灰色 ④口縁部-底盤1/2周	住居壁土出土
28	須恵器 高台付 环	口径 13.3 底径 (7.0) 高さ 4.9	断面丸形の台部。内側気味に開き口 縁傾斜外反。	外周 回転ナダ。底部端部を 切り後縁割付け。 内周 回転ナダ。	①角閃石、雲母、輕石、 砂岩の混入 ②良好 ③ 灰色 ④芯-底部1/3周	住居壁土出土
29	須恵器 环	口径 12.3 底径 5.8 高さ 3.6	平底。直線的に外傾して脚く体部。	外周 回転ナダ。底部右回転 角付未充填。 内周 回転ナダ。	①鉄鉱石、砂岩、軽石 ②良好 ③淡白色 ④ほぼ光形	住居壁土出土
30	須恵器 环	口径 (12.1) 底径 (5.8) 高さ (4.2)	I型縦部丸座を持ち外反する。	内外面回転ナダ。	①石英、黒岩含む、軽石の 微粒子含む ②良好 ③淡白色 ④底部-体部破片	住居壁土出土
31	須恵器 环			外周 平行叩き。 内周 口縁吹き。	①軽石、薄石、石英 ②良好 ③灰色 ④破片	住居壁土出土
32	土師器 環	口径 (15.0)	外反して脚くI型部。	外周 口縁部斜ナダ。脚部へ タクズリ。 内周 I型部横ナダ。脚部へ タクズリ。	①石英、砂岩、黒岩 ②良好 ③淡白色 ④口縁部破片	I型縦部丸 座有り 住居壁土出土
33	土師器 台付環	底径 9.0	台部への字状に大きく開く。	外周 台部へケズリ。台部 板ナダ。底部付毛目状 のナダが一圓する。	①軽石、石英、薄石の小 結晶、風呂呑み ②良好③ 淡褐色④底部破片	住居壁土出土
34	土師質 环	口径 (19.0)	脚中位に丸味を持ちI型部傾めに外 反。	外周 I型部横ナダ。脚部へ タクズリによる脚毛目 状横ナダ。中位-下位 縦タクズリ。 内周 口縁部横ナダ。脚部横 ヘラナダ。中位-下位 縦筋ナダを兼ね。	①安山岩含む。細粒 ②良好 ③淡白色 ④口縁部破片	住居壁土出 土
35	須恵器 盘	口径 (13.0)	口縁部兩面な段を有す。	外周 I型部回転ナダ後小 口付部による脚突状の 文様。頭部付近斜-I工 具による条板状文様。 内周 回転ナダ。	①砂岩、角閃石、細粒の 微粒子含む ②良好 ③ 淡褐色 ④口縁部破片	住居壁土出 土
36	須恵器 环	底径 9.5	短い台部。外傾して脚く脚下位。	外周 回転ナダ。底部付段へ タクズリ。 内周 回転ナダ。	①石英、軽石、薄石、安 山岩の混入 ②良好 ③灰色 ④底部破片	住居壁土出 土
37	須恵器 环	口径 12.9 底径 5.0 高さ 4.2	内側気味に開く体部。内外面に「利」 の凸面有。	内外面回転ナダ。底部右回 転角付未充填。	①石英、軽石、シルト岩 ②灰白色 ③良好 ④口縁部-底盤2/3周	内外面回転 者 住居壁土出 土
38	土師質 环	底径 6.5	丸な作りの台部。	内外面回転ナダ。底部右回 転角付後底部貼付。	①軽石の小礫多孔に含む ②良好 ③淡褐色 ④台形	住居壁土出 土

表7 遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成形・整形の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④焼存	備考
39	土師質壺	口径 13.0	内窓して開き口縁部は外反。	内外面同軸ナメ。	①粗石、安山岩を含む ②良好 ③黄褐色 ④口縁部～体部1/2弱	カマド出土
40	須恵器杯	底径 16.6	平底。外傾して廣く底部下位。	内外面同軸ナメ。底部右回転 未切り未調整。	①石英繊維、塵を含む ②良好 ③黄褐色 ④底部付近破片	住居裏土出土
41	須恵器高台付壺	底径 7.1	直立丸柱に聞く台部。	内外面同軸ナメ。底部右回転 未切り未調整。	①酸灰質砂岩、砾石、青 白小片 ②良好 ③灰白色 ④口縁部～体部1/2弱	住居裏土出土
42	須恵器高台付壺	口径 13.8 底径 6.6 高さ 5.9	口部後円形を呈し作りは難。	内外面同軸ナメ。底部回転未 切後台部貼付。	①粗石、石英、雲母を含 む ②良好 ③灰褐色 ④底足。口縁～体部破片	住居裏土出土
43	須恵器壺	口径 14.0	内窓気味に聞く体部。器薄。	内外面同軸ナメ。	①砂岩、砾石、石英を含 む ②良好 ③灰白色 ④口縁部～体部破片	住居裏土出土
44	須恵器壺	口径 12.6	内窓気味に聞く体部。器薄。	内外面同軸ナメ。	①粗石、酸灰質砂岩を含 む ②良好 ③灰白色 ④口縁部～体部破片	住居裏土出土
45	須恵器壺	口径 12.0	わずかに内窓して聞く体部。口唇部 丸柱を持つ。	外面 口唇部横縫ナメ。体部ハ ケメ状の凹凸ナメ。 内面 同軸部ナメ。	①酸灰質砂岩、砾石が多い ②良好 ③灰白色 ④口縁部～体部破片	住居裏土出土
46	須恵器壺			外面 平行叩きとカキ目。 内面 内凹状叩き。	①石英、粗石、砾石 ②良好 ③灰白色 ④口縁部～体部破片	住居裏土出土
47	土師質壺	口径 20.0	最大径を測上位に持ち、底部斜く外 反。	外面 口縁部横ナメ。底部絞 ヘラナメ。 内面 口縁部横ナメ底部ナメ	①粗石、砾石 ②良好 ③黄褐色 ④口縁付近小片	住居裏土出土
48	土師器壺		口縁部外反して聞き端部上下尖る。	内外面同軸ナメ。	①石英、角形、円錐が多 く含まれる ②良好 ③灰褐色 ④口縁部破片	住居裏土出土
49	須恵器羽蓋		耳は所産二角状では縁部内傾。	内外面同軸ナメ。	①酸灰質、安山岩、砂岩 石英 ②良好 ③灰褐色 ④口縁部小片	酸化 住居裏土出土
50	須恵器高台付壺	底径 6.0	鍛な作りの台部。	内外面同軸ナメ。底部付止系 切後台部貼付。	①珪石、粗石 ②良好 ③灰色 ④口縁部破片	対側穴出土
51	土師質壺	口径 12.4 底径 5.8 高さ 4.6	体部内窓気味に聞き口縁部斜く外反 側手。	内外面同軸ナメ。底部右端部 未切り未調整。	①灰石、全体が相當 良好 ③淡黃褐色 ④底部～口縁部1/4弱	赤瓦穴出土
52	土質器壺	口径 20.0 標高 25.3	丸底。最大深を頂上位に持つ。口縁 部はコの字状に窓。	外面 口縁部横ナメ。底部同 軸ナメ後中位～下位絞 ヘラケメリ。部分的に 縫ナメ。底部ヘラ削痕 内面 同軸ナメ。中位～下位 縫によるナメ。	①風鈴石、石英、砂岩、 粗石 ②良好 ③淡褐色 ④70%焼存	口縫外側 付石 カマド出土 対側穴出土
53	須恵器壺	口径 14.4	内窓気味に聞き口縁部弱く外反。	内外面同軸ナメ。	①石头小片、酸灰質砂岩 ②良好 ③白灰色 ④体部～口縁部1/6弱	上坑3層上 山土
54	須恵器壺			外面 平行叩き及び上位に成 状文を施す。	①粗石、赤褐鉄砂岩 ②良好 ③灰色 ④口縁部破片	内外面自然 物かかる 上坑3層土
55	土師器壺		太い粒状の脚部。	外面 縮ヘラケメリ。 内面 縮ナメ。	①砾石、砂岩、均質 ②良好 ③黄褐色 ④脚部	

表8 造物觀察表

番号	器種	法寸 (cm)	器形の特徴	成形・彫形の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
56	須恵器 壺			外面 平行印き。 内面 円弧状印き。	①質岩、板岩、鐵鉄鉱 ②良好 ③灰色 ④破片	
57	須恵器 壺			外面 平行印き。 内面 同心円状の印き。	①質岩、板岩 ②良好 ③灰白色 ④破片	
58	須恵器 壺			外面 平行印き。 内面 同心円状の印き。	①質岩、板岩 ②良好 ③灰白色 ④破片	
59	須恵器 壺			内面 円弧状印き。	①細い砂質 ②不良 ③淡黃灰色 ④破片	
60	須恵器 壺			外面 平行印き。 内面 同心円状の印き。	①質岩、板岩 ②良好 ③灰白色 ④破片	
61	土師器 壺	LH径 (10.0)	外面に壁を持ち口縁部直立する。	外面 口縁部横ナデ。体部へ ラケズリ。 内面 横ナデ	①耐火質砂岩 ②良好 ③灰黑色 ④口縁部破片	
62	土師器 壺	底径 6.4		内外面凹板ナデ	①輕石、角閃石粒 ②良好 ③灰褐色 ④底部付近小片	
63	土師器 高台付 壺	底径 5.4		外面 口縁ナデ。底部右回転 糸切り後台部貼付。 内面 ヘラミガキ後無色施塗。	①輕石、角閃石粒 ②良好 ③灰褐色 ④底部1/2周	内面黒角処理
64	須恵器 壺	底径 (12.4)	直線的に外反して開く。	内外面温版ナデ。	①輕石質砂岩、耐火質砂岩 ②良好 ③灰白色 ④L接縫・体部破片	
65	須恵器 壺	底径 (5.8)	底部の器肉無い。	内外面回転ナデ。底部右回転 糸切り後台部貼付。	①角閃石、安山岩微少砂 耐火質砂岩 ②不良 ③灰黑色 ④底部1/3周	
66	須恵器 高台付 壺	底径 (6.8)	右部への字状に外反。器部は平底。	内外面回転ナデ。底部右回転 糸切り。	①石英の微内輪、耐火質 砂岩 ②良好 ③灰黑色 ④底部破片	
67	須恵器 高台付 壺	底径 (8.0)		内外面回転ナデ。底部右回転 糸切り後台部貼付。	①輕母、石英、耐火質砂 岩 ②良好 ③白灰色 ④底部破片	
68	土師器 壺	LH径 (18.0)	腹部から外反する口縁部。	外面 口縁部横ナデ。肩付 横ナデ後ヘラケズリ。 内面 口縁部横ナデ。剥離痕 ヘラナデ。	①輕石、坤石細粒 ②良好 ③灰褐色 ④口縁部1/4周	
69	土師器 壺	底径 (4.0)	器肉の厚い部分。	外面 横へラケズリ。底部へ ラケズリ。	①结晶片岩、石英細粒多 等 ②良好 ③灰褐色	
70	土師質 壺	底径 (20.0)	側部より外反して側くに縁部。	内外面回転ナデ。	①輕石、鐵鉄質 粗質 ②良好 ③灰褐色 ④口縁部破片	
71	須恵器 壺			外面 肩部に1単位4本のか き目。	①輕石、砂岩 ②良好 ③灰白色 ④破片	自然縫が内 外面にかかる
72	須恵器 壺			外面 カキ目及び格子状印き。	①質岩、板岩 ②良好 ③光沢のある灰白色 ④破片	自然縫が外 面上にかかる
73	須恵器 壺			外面 カギ目。 内面 円弧状印き。	①質岩、板岩、鐵鉄質 ②良好 ③灰色 ④破片	
74	須恵器 壺			外面 平行印き。 内面 同心円状印き。	①砂岩、チャート、板岩 ②不良 ③黄灰色 ④破片	

表9 遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成形・整形の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
75	須恵器 壺			外面 平行叩き。 内面 円弧状叩き。	①頁岩、輕石、磁鐵鉄 ②良好 ③灰白色 ④破片	
76	須恵器 壺			外面 平行叩き。 内面 円弧状叩き。	①頁岩、輕石 ②不良 ③褐色灰青色 (0破片)	
77	須恵器 壺			外面 略め格子叩き。 内面 円弧状叩き後すり消し。	①頁岩、輕石、磁鐵鉄 ②良好 ③灰色 ④破片	
78	須恵器 壺			外面 平行叩き。 内面 同心円状叩き。	①頁岩、輕石 ②良好 ③灰白色 ④破片	
79	須恵器 壺			外面 扇子状叩き。 内面 同心円状叩き。	①頁岩、輕石 ②良好 ③灰白色 ④破片	
80	須恵器 壺			外面 平行叩き。 内面 円弧状叩き。	①頁岩、輕石、磁鐵鉄 ②良好 ③灰色 ④破片	
81	須恵器 壺			外面 平行叩き。 内面 円弧状叩き。	①輕石、砂岩 ②良好 ③灰白色 ④破片	外面自然釉 かかる
82	須恵器 壺	口径(25.6)	大きく外反する口縁部。	内外面削輪ナダ。	①輪石巻織松 ②良好 ③灰色 ④口縁部破片	
83	須恵器 壺	底径(10.6)	台部が短く板地面は広い。	外側回転ナダ。底部切り落し後合部貼付。 内面 同軸ナダ。	①石英巻織、カオリソ ②良好 ③灰白色 ④底部～全体破片	主然釉がう すくかかる
84	灰陶陶 器 壺	口径(15.6)	内側気味に開き端部で極めて外反す。	内外面削輪ナダ。 口縁部～底部にかけ内外面輪を施す。	①カオリソ ②良好 ③灰色(釉の部分淡緑色) ④口縁部～底部剥片	
85	灰陶陶 器 壺	口径(13.6)	内側気味に開き端部丸味を持ち折り返す。	内外面回転ナダ。 口縁部～底部にかけ内外面輪を施す。	①カオリソ ②良好 ③灰色(釉の部分黃白色)	
86	灰陶陶 器 長縄等		しまった頭部から外反気味に開く口 縁部。	内外面削輪ナダ。	①地質で理はない②良好 ③白灰色④口縁付近破片	
87	土 壷	口径(34.0) 底径(35.6) 高さ 5.3	底部より垂直気味に立ち上がる口縁部。	内外面回転ナダ。	①輪灰黄砂岩 ②良好 ③黒灰色 ④底部破片	
88	陶 石	全長(13.8) 横幅 10.7 厚さ 5.8	5面使用。特に上面と左側面崩らか で凹む。		①石英粉岩	重量 1320g
89	石	全长 13.0 横幅 6.5 高さ 3.8			①輝石安山岩	重量 352g 床面出土
90	土 壷	長さ(4.0) 径 1.5		棒状工具巻き付け。	①均質 ②良好 ③淡褐色 ④環状欠損	重量 10g
91	土 壷	長さ(3.5) 径 1.3		棒状工具巻き付け。	①均質 ②良好 ③淡褐色 ④環状欠損	重量 7g

第3章　まとめ

人見北原遺跡の調査について、検出した遺構・遺物及び周辺の痕跡の状況を合わせて、若干の考察を加えてまとめとしたい。

（検出した遺構・遺物）

縄文時代　中期土器

古墳時代　竪穴式住居跡　1軒

平安時代　竪穴式住居跡　3軒

江戸時代　道路状遺構　1

今回の調査地区は、西に隣接する松井田工業団地遺跡の集落範囲に含まれると思われるため、両遺跡の調査成果を総合して考察することが必要とされる。

松井田工業団地遺跡では、古墳時代を中心とした住居跡が約450軒、浅間B軽仁（1108年）の降下により埋没した平安時代の水田跡等が検出されており、微高地状の地形を利用した生活の場としての集落遺跡の広がりが考えられる。

これに対して、北には塚原・足名田・法正寺地区にわたる古墳群がある。詳細な調査は実施されていないが、埴輪を伴わない横穴式石室を主体部とした小規模な円墳が主となっている。これをもとに、古墳群の年代をおおまかに7世紀代と考えると、松井田工業団地遺跡の中心となる古墳時代後半の集落の年代とほぼ一致するものと思われ、墓域としての位置付けが考えられる。ただし、古墳群周辺における集落の広がりと、各古墳の詳細な資料を欠く現時点においては、推測の域を脱し得ない。この地区的古墳群周辺における集落等の遺跡分布状況は、今後の分布調査実施によって次第に明らかになってくるものと思われる。現時点では法正寺地区での平安時代の遺物の散布が認められるが、古墳時代の遺物散布はほとんど確認できない。また、松井田工業団地遺跡では竈に埴輪を転用している例が認められていることから、埴輪を作った古墳の存在についても、その可能性が十分に考えられるので今後の成果を待ちたい。

今回の調査では、両側に側溝を有する道路状遺構を検出した。近年では各時代にわたる道路遺構の調査例が増加し、多くの研究成果が公表されている。松井田町においても発掘調査実施の增加に伴って多くの道路状遺構の検出がみられ、交通史の解明に大きな手掛けを与えている。古代「東山道」のルート解明のための資料の発見にも大きな期待をもたれているが、特に碓氷峠越えのルートとともに古代交通史上の重要な視点ととらえられる。また、近世「中山道」とともに、「様名道」や「妙義道」は、信仰対象のあり方とその交通の歴史を知るうえで重要な位置をしめている。「様名道」については研究の成果が徐々に公表されつつあるが、「妙義道」では今回の調査例が研究をすすめるうえでの好資料となると思われる。考察については附録により示されているので参照されたい。



調査区全景（西から）



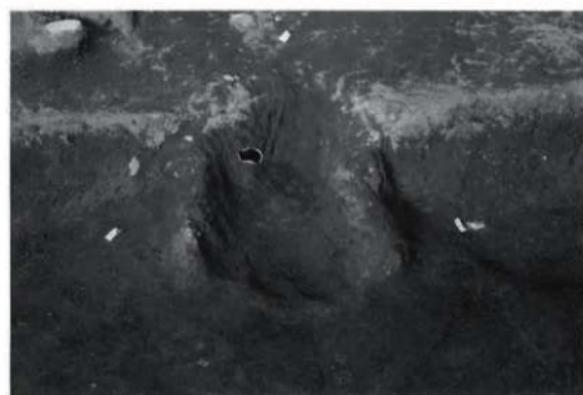
3号住居 出土遺物



3号住居
遺物出土状態



3号住居
全 景



3号住居
カマド

3号住居
遺物出土状態

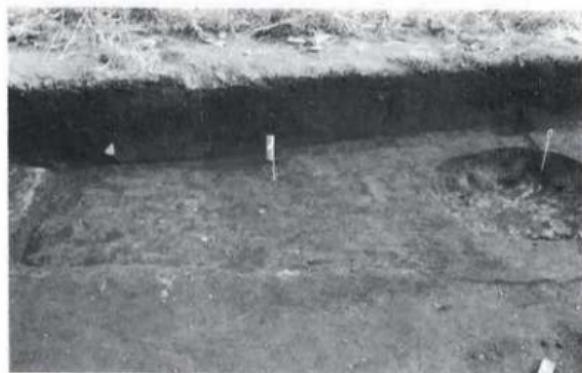


3号住居
遺物出土状態



3号住居 高坏出土状態





1号住居
全 景



1号住居
遺物出土状態



1号住居
遺物出土状態

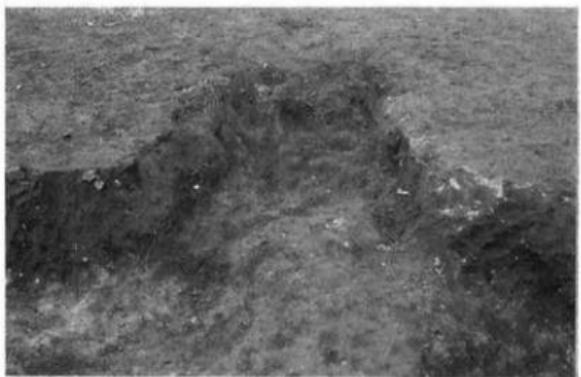
2号住居
遺物出土状態



2号住居
全 景

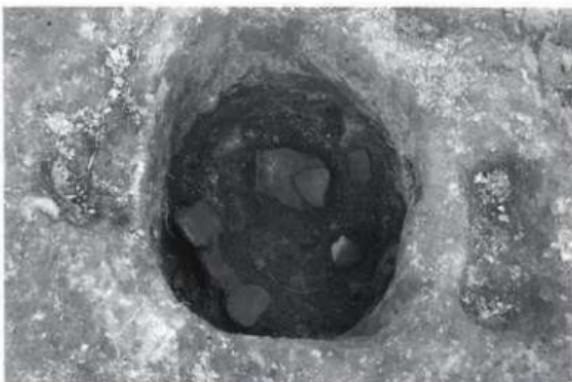


2号住居
カマド





4号住居
全 景



4号住居
貯藏穴内
遺物出土状態

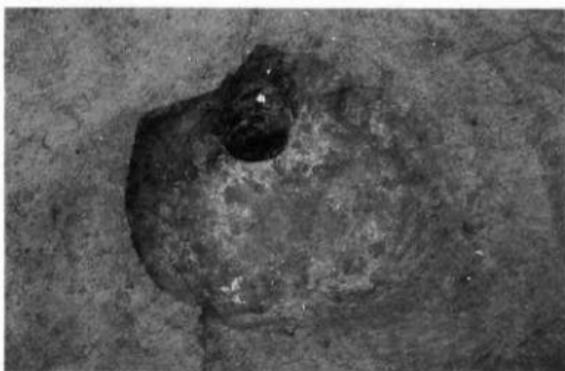


4号住居
カマド

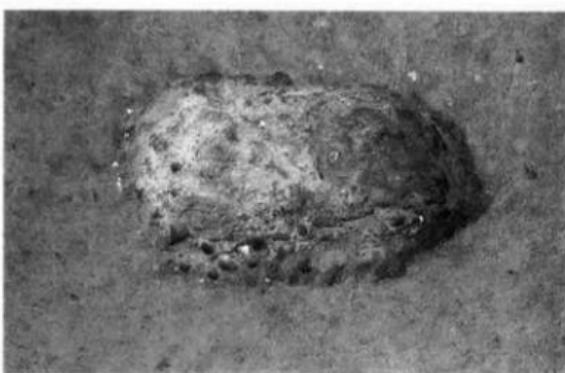
4号住居
カマド



4号住居 カマド



土坑 1



土坑 2

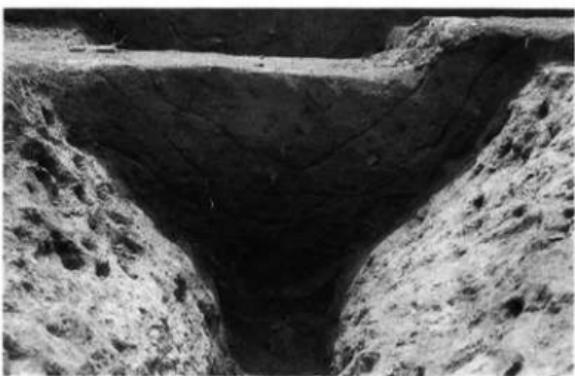


土坑 3

道路状造構
全 景



道路状造構
側溝 1
セクションB

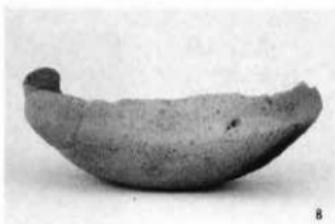


道路状造構
側溝 2
セクションB





1



2



3



4



5



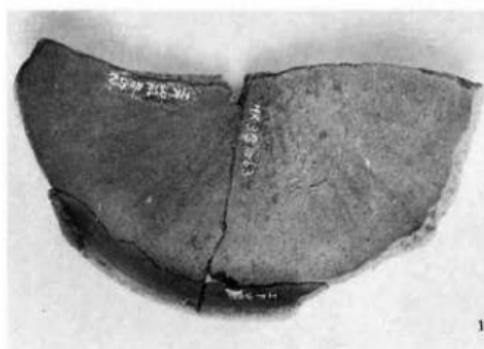
6



7



8





28



29



33



36



35



34



17



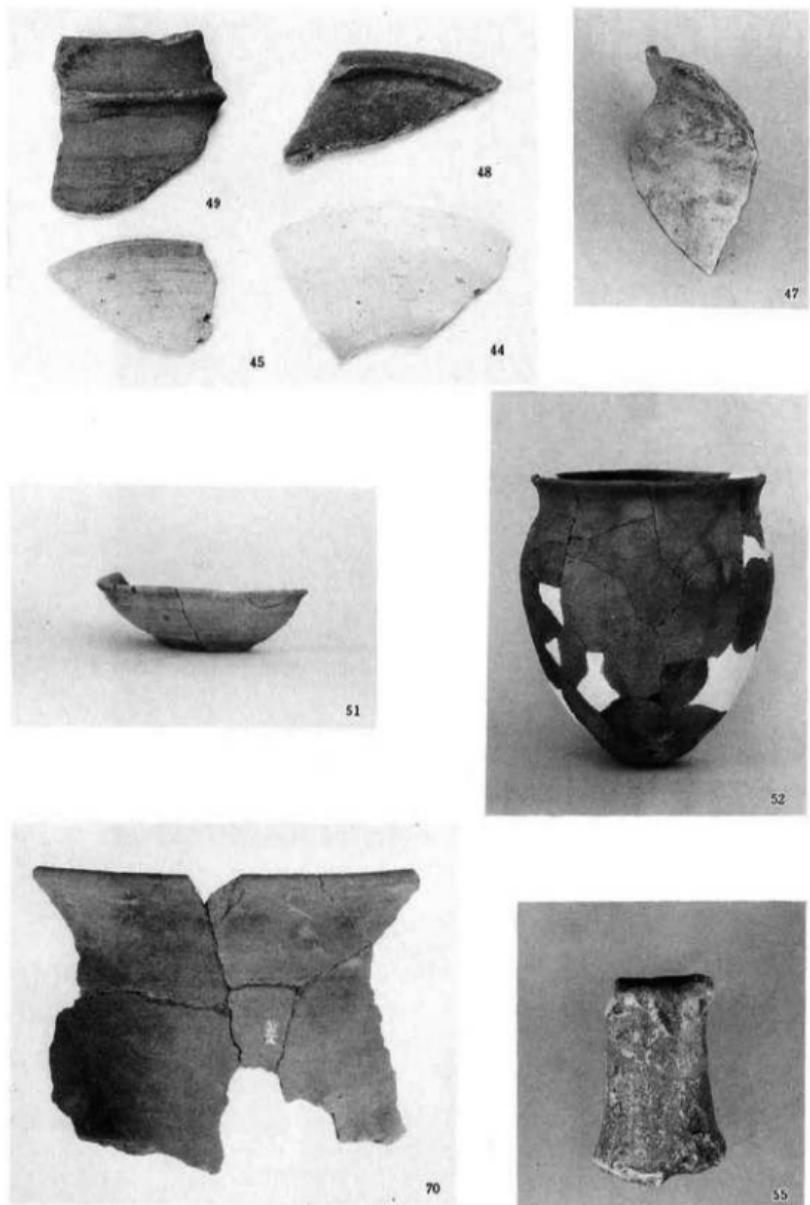
18



42

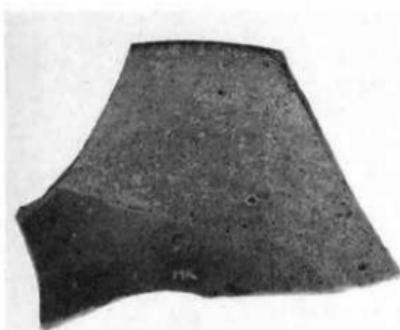


38





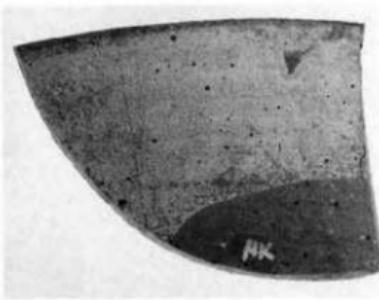
84外面



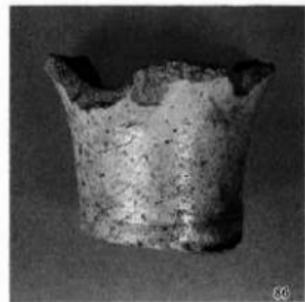
84內面



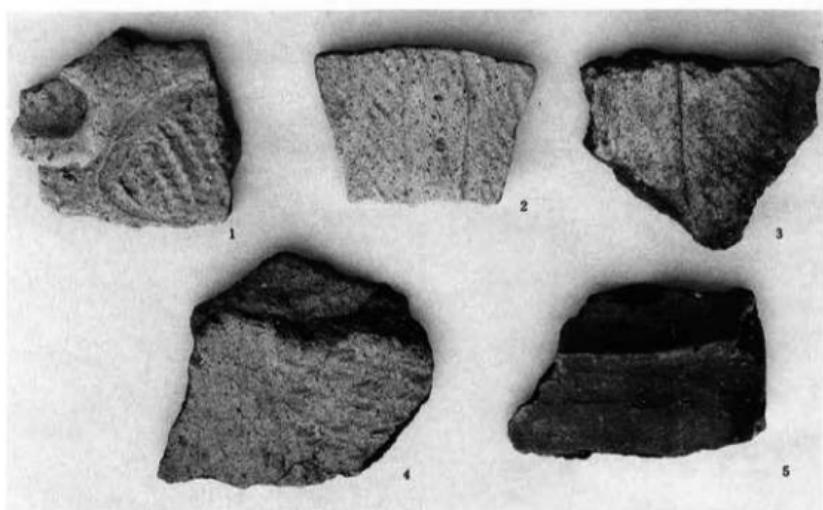
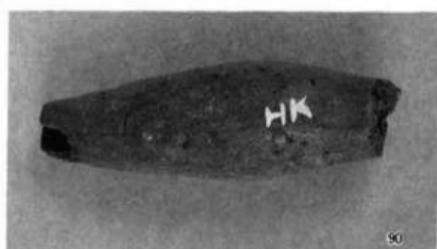
85外面



85內面



86



「妙義道の考察」

松井田町文化財調査委員

上原富次

妙義神社への参詣道がいわゆる「妙義道」である。妙義神社の前身は、波古曾の大神といわれ、その創建は宣化天皇二（537）年と伝えられている。江戸期には上野東叡山宮家の御隠居所となり、皇室の厚い崇敬を受けた。また、歴代將軍を始め加賀の前田侯外諸大名の崇敬も篤く、中山道を往還して、参勤する者、上京、登坂する諸大名悉く参詣を怠ることがなかったと云われている。その上、「將軍以下諸大名この門前二丁の間、下馬の札をとった」と伝えられる程の格式ある神社であった。

上野神名帳（延喜式神名帳に相応する上野の国帳である）のうち一ノ宮本によると碓氷十五社の第二位にあり、從二位波古曾大明神とある。類從本には碓氷二十五座の第一位に記され從二位波古曾大明神とある。また、總社本にも碓氷郡十五社の首位に挙げられ從二位波古曾大明神とある。上野国は弘仁二（811）年に大国になり、天長三（826）年には親王の任國となつた程の国である。都を発した東山道が碓氷峠を越えて最初に入るのが上野国碓氷郡である。その碓氷十五社の第一位が妙義の波古曾大明神である。

妙義神社略記によると、波古曾が妙義に改められたのは「後醍醐天皇に仕え奉りし權大納言長親卿、この地に住み給いて明々巍々たる山の奇勝を愛で、明魏と名付けしものを後世妙義と改めたと思われる」といっている。

妙義神社は古くから格式の高い神社で、朝野の崇敬が篤かったことは前述の通りであるが、近世になると、その初期から公家・諸大名の参詣が多く、とりわけ中期以降には、開運・商売繁盛・火防の神・農耕桑蚕の神として広く庶民にも信仰され、関東はじめ甲信越にまで「妙義講」が結成されたという。

従って、妙義道も南面に東面に、北面にとそれぞれ幾筋も開かれ、多く善男善女の参詣客で賑わった。

今回の発掘調査で検出された「道の遺構」はこのような妙義道の一つである。そこで、中山道を起点とした、松井田方面からの妙義道を探ってみよう。

ルート1

検出された妙義道は安中市原市から中山道と分かれ、荒瀬の西端から鉢巣橋近くに下り、ここで碓氷川を渡り、安中市と松井田町の境界線を通って発掘地点に達する。そしてこの境界線が妙義道そのものなのである。

妙義道は更に南西に進んで、城下から西上し猫沢川に添うように大王寺・別所・八城・越泉を通って黒門坂に至る。字青木に「妙義道」（天保二年、角柱、写真1）の道しるべがある。

しかし、このルートは明治17年信越線の工事が始まると、発掘地点の数メートル北で分断され廃道となった。そして新たに妙義新道が開通した。

ルート 2

郷原の西端で中山道と分かれ、南側の斜面を下って松井田町大字二軒在家字茶屋附近で碓氷川を渡る。この渡河地点には、今も粘板岩の河床を真径30センチメートル程に穿った橋脚を立てた穴が三ヵ所ばかり残っている。郷原（写真2）と茶屋（写真3）には妙義道（文化五年）と書かれた道しるべを兼ねた立派な常夜燈がある。道は大字二軒在家字鳥留、八城・行田を通過して妙義黒門坂に達する。この道筋には前記の外に「右妙義山道」（建立年不明、写真4）の道しるべもある。現在は渡河地点の茶屋に橋がないので中山道からの通行は不能である。

ルート 3

中山道松井田宿の中央四ツ角より南へ折れて、中瀬で碓氷川を渡り大字八城字中村で2のルートに合流する。この道筋も信越線で分断され一部は廃道となった。

国文学者清水浜臣の紀行文「上信日記」によると、文政二年壬四月六日浜臣が妙義参詣のために通ったのはこの道筋であることがわかる。

ルート 4

松井田宿の上ノ木戸を出た所から中山道と分かれ、大字新畠字中島・陣場・東下原と行って、ここで碓氷川を渡り、行田の北西で2及び3のルートと合流する。この道筋には字中島に妙義道（寛政六年、写真5）の道しるべがある。この道筋も碓氷川の仮橋が昭和30年代に流失したままなので通行は不能である。

これから述べる2つのルートは西から来た人々が利用した妙義道である。

ルート 5

これは県指定史跡五科の茶屋本陣・お西の前から南に折れ、蟹沢橋を渡って、小竹・大沢・源ヶ原・黒門坂に通じていた。大沢橋を渡り、滝名田への分かれ目に「めうぎ道」（享保十三年、写真6）の道しるべがある。

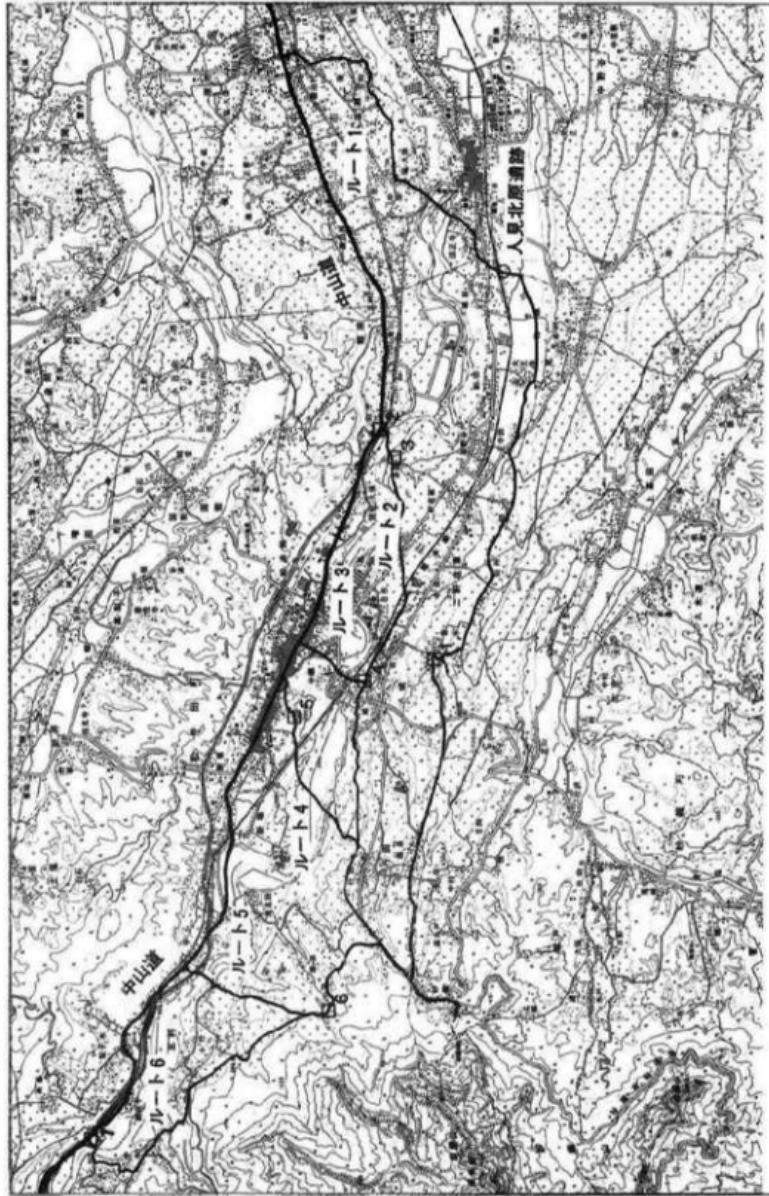
また、蟹沢橋の掛替の節、この道筋は妙義の参詣道なので、橋材を前々の通り戴きたいという妙義神社宛の願書（嘉永五年）が残っている

ルート 6

大字横川字小山沢の「めうぎ道」（建立年不明、写真7）の道しるべのところから南へ折れ、中木橋を渡って、中木・小竹と行って5のルートと合流する。

以上の6ルートのうち、中世からの妙義道は1と6のルートであろう。1のルートは、原市の分岐点より北方へ1キロメートル程で推定東山道（『歴史の道調査報告書 東山道』群馬県教育委員会）に達し、6のルートは小山沢から数百メートル北方、字高墓で推定東山道に合流するからである。道順も自然である。（附編図-1を参照）

附圖一 「妙義連」推定路線図 (縮尺 1:50,000)



附圖版 1



1 字青木所在



2 鄭原所在



部 分



3 (上左) 茶屋所在

(上右) 部分

4 (右) 八城所在





5 (左) 字中島所在
(上) 部 分



6 (左) 源ヶ原所在
7 (下) 字小山沢所在



松井田町文化財調査報告書第2集

人見北原遺跡

—(一) 碓部停車場妙義山線道路特殊改良

(一種)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行日：平成2年3月25日

編集：松井田町教育委員会

社会教育課文化財保護係

発行：松井田町教育委員会

〒379-02 群馬県

碓氷郡松井田町大字新堀1371

T E L 0273 (93) 3335

印刷：碓氷印刷株式会社